明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり 本編

2016
5
ISSN 1340-8917



特集 楽しむスポーツイベントによる地域活性化

特集編分冊化スタート
本編では代表５事例、特集編では全 12 事例を紹介

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです

地域づくり　2016-5

CONTENTS

1 巻頭エッセー／「輝き　あんしん　プラチナ社会」の実現に向けて　後藤　斎（山梨県知事）

特集　楽しむスポーツイベントによる地域活性化

2 基調論文 地域資源を生かしたスポーツが地域を活性化　牧村真史
6 北海道滝川市 ゆっくり走って地域住民との交流や自然を体験　木村直也
8 新潟県魚沼市 豪雪を生かしてスポーツ雪合戦　渡部麻美
10 静岡県伊東市 地元高校生考案の「まくら投げ」が人気イベントに！　栗原扶美代
12 和歌山県すさみ町 スポーツフィッシングで地域振興　朝本紀夫
14 鳥取県湯梨浜町 小さな村から生まれたスポーツを全国へ　東原正治

【特集編では基調論文、全12事例を全て掲載～特集編のみに掲載される事例は以下の通り】

●北海道福島町 北の大地で美しくも激しい戦い「女だけの相撲大会」　河原塚利雄
●青森県つがる市 人間愛がテーマの国際交流・スポーツイベント　葛西兼光
●山形県鶴岡市 千四百年の歴史に包まれた２４４６段の石段にチャレンジ！　安達一春
●東京都 ゴミ拾いをスポーツ化して地域の課題を解決　馬見塚健一
●愛媛県松前町 直径１㍍の桶「はんぎり」で海上を競漕　松田周二
●高知県いの町 清流仁淀川で国際水切り大会　生野宜宏
●沖縄県糸満市 吉凶を占う神事の大綱引　大城高彦

レギュラーリポート

16 移住・定住・交流推進支援事業　茨城県常陸太田市
地区文化財の酒蔵を活用して交流拠点整備　菊池　竹一

18 国内調査報告　山形県上山市、鹿児島県指宿市
地域資源を活かしたヘルスツーリズム

20 アンテナショップ
「日本橋 長崎館」がオープン　山本　政隆

21 センター通信

22 平成27年度ふるさとづくり大賞・第20回ふるさとイベント大賞内閣総理大臣賞表彰式

首長の思い
32 人・まち・みどり みんなで創る“豊かさ”実感都市・かごしまの実現を目指して　森　博幸（鹿児島市長）

表3 手前みそですが…　【福井県越前市】

グラビア　第20回ふるさとイベント大賞

23 ふるさとキラリ賞 いす-1GP『キララ２時間ISU耐久レース』　京都府京田辺市
24 ふるさとキラリ賞 日本初のホタル舟　山口県下関市
25 優秀賞 にいがた総おどり　新潟県新潟市
26 優秀賞 菓子祭前日祭　兵庫県豊岡市
27 優秀賞 燈籠祭　三重県紀北町
28 最優秀賞・総務大臣表彰 會津十楽　福島県会津若松市
30 大賞・内閣総理大臣賞 桜流鏑馬　青森県十和田市

表紙　ジャンボこいのぼり

（埼玉県加須市）

加須市の名物「ジャンボこいのぼり4世」は、全長100㍍、重さ330㌔で世界一の大きさを誇っています。

「ジャンボこいのぼり」は、毎年5月3日に加須市を横切る大河、利根川の河川敷緑地公園にて開催される「加須市民平和祭」で年に1度、遊泳する雄姿が見られます。

このジャンボこいのぼりは、昭和62年12月に加須青年会議所が中心となり、「こいのぼりによるまちおこしをしよう」と木綿の生地で長さ100㍍、重さ600㌔、ドラム缶3本分の塗料を使用し制作したのが始まりです。

歴代のジャンボこいのぼりは、破れや老朽化等から約7～10年で更新されています。現在の4世は、延べ3420人の市民の協力により、平成26年3月に完成したものです。

普段はその大きさゆえ倉庫に眠っていますので、5月3日の利根川河川敷にお出掛けになって、超大型クレーン車に吊られて大空に舞うその雄姿を是非ご覧ください。

問い合わせ先＝加須市商業観光課（0480・62・1111）

（写真提供＝加須市）



大空を泳ぐ100mのジャンボこいのぼり

ESSAY

巻頭エッセー

「輝き　あんしん　プラチナ社会」の実現に向けて



山梨県知事 ● 後藤　斎

地方創生の時代にあって、全国の自治体が生き残りをかけて鎬（しのぎ）を削る、そんな様相を呈して参りました。大きな変革が必要とされる時であり、これまで以上に自分の住む地域の素晴らしさを知り、外向けにアピールすることが大切になってきております。

山梨県は、世界文化遺産の富士山をはじめとする豊かな自然環境に恵まれた風光明媚な地であります。春は桃の花が咲き誇りあたかも桃源郷に迷い込んだような田園風景、夏は静けさをたたえた神秘的な渓谷や湖畔でのキャンプ、秋には芳醇なワインを楽しみながら愛でる色づく山々、冬は雪化粧をし、貴婦人のような佇まいを見せる霊峰富士と、四季折々に様々な楽しみを提供しております。

また、最高の品質を誇るブドウやモモなどの果実、江戸の粋人に愛された甲斐絹の伝統を今に引き継ぐ織物産業、伝統と高度な技術を誇る宝飾加工など魅力的な地域資源に溢れています。加えて、日照時間、ミネラルウォーター生産量、数値制御ロボットの出荷シェアなど、数々の「日本一」もあります。

しかし残念なことに、全国での山梨県の知名度はもうひとつというところです。私も機会あるごとにＰＲに努めておりますが、今、知名度を上げ、また、日本の中で山梨が重要性を増していく大きなチャンスが訪れていると感じております。

建設が着々と進行している中部横断自動車道が完成すると日本の中心を横断する新たなルートが開通し、東名高速道路と中央自動車道という日本の物流を支える二大幹線道路が直結されることになります。また圏央道により、東京都心部を経由することなく、東名高速・中央道に繋がるルートも確保されましたので、新たな人とモノの流れが生まれ、山梨は重要な交通の結節点となります。

さらに、２０２７年にはリニア中央新幹線が東京・品川～名古屋間で開業する予定です。リニアを利用すると、東京・品川～甲府間が25分、甲府～名古屋間が40分となり、山梨は首都圏、中京圏への通勤・通学が可能な地域となります。

こうした交通インフラの整備により、あたかも日本列島が山梨を中心に、ギュッと縮まるような効果が期待されます。こうした効果を十分に生かし、全国各地で実を結ぼうとしている地方創生の成果を結びつけるハブとしての役割を担い、東京一極集中の解消に資する地域に育てていきたいと考えております。

こうしたダイナミックな変革のためには、先見性を持つ人材を育てることも重要です。あと10年生きながらえていたら天下人となっていたと評される戦国武将の武田信玄公をはじめ、明治以降の日本の基盤づくり、特に鉄道事業で活躍した根津嘉一郎や小林一三など、山梨県はこれまでに多くの偉大な人材を輩出しております。昨年、ノーベル生理学・医学賞を受賞し、「人のためになることをする」という精神が世界中の人々の共感を呼んだ大村智先生も、山梨が生んだ偉人の一人です。

甲州人には進取の気性に富み新しい世界を切り開いてく面と、伝統を守り歴史を重んじるという二面性があります。こうした甲州人気質を生かし、斬新な発想で世界をリードするとともに、ふるさとを愛し続ける人材を育成して参ります。

日本は人口減少社会という、これまで経験したことのない状況を迎えております。山梨も例外ではなく、むしろ少子高齢化の進行が早く進む、人口問題が先鋭化している地域です。このような状況の下での、社会の健全な発展のためには、これまでの拡大志向ではなく、地域のリソースを十分に生かした調和の取れた発展を目指さなければなりません。

山梨県では新たに「ダイナミックやまなし総合計画」を策定し、県民の皆さんが明るく希望に満ちた暮らしができる「輝き　あんしん　プラチナ社会」を目指し動き始めたところです。時代の要請を正しく捉え、全ての県民の皆さんの英知を結集したふるさとづくりを進めたいと考えています。

特集

楽しむスポーツイベントによる地域活性化

地域資源を生かしたスポーツが地域を活性化

―日本のスポーツの現状と地方創生―

集客創造研究所所長 ● 牧村 真史

オリンピックで高まるスポーツへの関心

2020年東京オリンピック・パラリンピックの招致が決定、今年はリオデジャネイロオリンピック・パラリンピックの開催年でもあり、スポーツへの関心が高まっている。

なでしこジャパンの女子サッカーワールドカップ優勝へ導いた澤穂希選手、ラグビー・ワールドカップの南アフリカ戦での歴史的な勝利でラグビーを一躍日本中の注目スポーツとした五郎丸歩選手、男子フィギュアで世界歴代最高得点の羽生結弦選手など日本のスポーツ界は数多くのヒーローを生み出し、こうしたアスリートによる競技スポーツの人気は出身地域の認知度向上や地域活性化に様々な波及効果を生み出している。

日本の競技人口は約7200万人（総務省平成23年社会生活基本調査）で日本の総人口の約6割がスポーツを行い、日本のトッププロ選手・アスリートを頂点に幼児から高齢者まで幅広い据野を持っている。

スポーツを大別にすると①野球、大相撲、サッカー等に代表されるプロスポーツ②オリンピック、ワールドカップ、国体等の競技スポーツ③全国スポーツレクリエーション大会、ねんりんピック等の生涯スポーツ―に区分され、多様な競技やレクリエーション、健康づくりとしてのスポーツが行われている。

日本レクリエーション協会では①若者の参加機会を通し地域コミュニティーの活性化②障がい者と楽しむレクリエーション③総合地域クラブづくり④高齢者の体力づくり⑤子供の体力向上⑥指導者養成、講演会―などを通しスポーツレクリエーションの支援を行い、これらの活動や地域の健康

筆者プロフィール

牧村 真史氏
（まきむら・まさふみ）

1950年、東京都生まれ。コミュニケーションプロデューサー。イベントプロデューサー。博覧会や大型イベントのプロデュースやコミュニケーション戦略、地域活性化の戦略の企画・開発・プロデュース等を得意とする。専門誌、コミュニティ紙の編集者を経て1980年に株式会社BRAIN 80を設立。現在、（株）集客創造研究所所長。Re-Public Initiative専務局長、柏崎市特別職シティーセールス推進官、全国菓子博覧会・三重総合プロデューサー、名古屋市公園経営アドバイザー等に就任。

ジャパンEXPO三陸・海の博覧会（1992年）総合プロデューサー、愛知万博（2005年）チーフプロデューサー、上海万博（2010年）日本政府館プロデューサー、上海万博協会運営海外顧問（2010年）、東京都築地市場「TOKYO ICHIBA PROJECT」広報プロデューサー等を歴任。

づくり、コミュニティーの活性化などからニュースポーツや遊び、環境づくりのスポーツ化など新たな取り組みが行われている。

昨年、新設されたスポーツ庁は生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営むことが出来る社会の実現を掲げ、スポーツＭＩＣＥ、障がい者スポーツ、少子高齢化時代に対応する健康長寿のスポーツ普及などを推進している。

また、東京への一極集中による地方の人口流出が、地域経済・産業・人材の空洞化、過疎化に拍車を掛け、地方の衰退をもたらしているとして、日本経済や地域の活力の向上を目的に地方創生が発表された。

土地ごとの祭りや遊びをスポーツ化して地域活性化の起爆剤に

地方創生では、国際戦略総合特区・地域活性化総合特区をはじめ各地域の特性に適応する様々な規制緩和を図る特区が設けられた。地域再生制度は中心市街地活性化をはじめあらゆる領域、ジャンルにまたがり、地域活性化の手法はハード（施設）からソフトへ、ソフトからコンテンツへと変化し、従来の手法を脱却し、多様な視点、複合的効果の観点から考える必要がある。

地方の小都市では国際規格を持つ施設を必要とする競技スポーツ、高額な施設投資や運営費を必要とするプロスポーツではなく、地域の資源や特性を生かし、大規模な施設投資を必要としない幅広い生涯スポーツを地域活性の起爆剤とすることが必要と考える。

例えば、南国土佐・高知を発祥とする「よさこい祭り」は全国に広がり多様な形態を持ち、市民、企業、団体が参加し地域のコミュニケーションを活性化するばかりでなく、観光産業を生み出した。富山県越中八尾のおわら風盆は江戸元禄時代に起源を持ち、格子戸のある旅籠屋、土蔵造りの民家のたたずまいのまちを吹き抜ける二百十日の大風をおさめ、五穀豊穣を祈る市民の祭りであったが、観光バスが列をなす観光コンテンツとなった。

日本の全国各地にあった盆踊り、運動会が日系移民を中心に世界各地に広がり、日本の進出企業が地域とのコミュニケーションづくりや相互の文化交流に一役買っているばかりでなく「クールジャパン」として評価を得て訪日観光の一助になっている。マレーシアでは３万５０００人の世界最大の盆踊り大会が開催されている程である。

南北に長く豊かな自然と風土の営みから生まれた土地土地の祭りや遊び、生活の知恵の中から競技化したり、その土地ならではの魅力的なコンテンツを磨き、行事やスポーツ、ＳＮＳ等のツールを活用し発信することが重要である。

農業、牧畜、林業、水産業の体験民宿が新しい地域づくりの起爆剤として話題となり、その地域の人でさえ従来見向きもされなかった食材や普通の生活そのものまでが新たな観光産業コンテンツとしての価値を生み出し、地方創生のエンジンとなっている。

少子高齢化が著しい地方の過疎地域や小都市では、健康長寿で誰でも、どこでも、いつでも、いつまでもできる「４つのでも」スポーツを高齢者と若者、子供が一緒に参加できる生きがいづくりや交流の場づくりとしてとらえ、地域の資源を活用し知恵と工夫でオンリーワンのまちづくり、まちなおしのコンテンツとして創り出すことが重要である。

柏崎市のシティセールスとスポーツ振興

新潟県柏崎市は東日本大震災、福島原子力発電所の事故を踏まえ、「原発にたよらないまちづくり」を目指し、２０１２年に柏崎の多様な資源や資産を活用し、市の持つ魅力を再発掘、再編成し、市内外に発信する「柏崎シティセールス基本構想」を策定した。２０１４年には「柏崎シティセールス推進計画」を策定、実行推進体制として柏崎シティセールス推進協議会を設立した。

柏崎シティセールス推進協議会は市内の民間団体、企業、大学等の12団体で構成し、各団体や市、市民などが行っていた個々の取り組みを、多様な主体の相互連携や参加を促し、市民を挙げて魅力や発信をすることを始めた。

「市民一人一人がセールスパーソン」をスローガンに、推進協議会に運営委員会を設置し、市内の30～40代の若手10人をメンバーが、従来の行政手法にとらわれない柔軟で自由な発想で柏崎の魅力を磨き、創り、発信する、プロモーション活動を担うことになった。

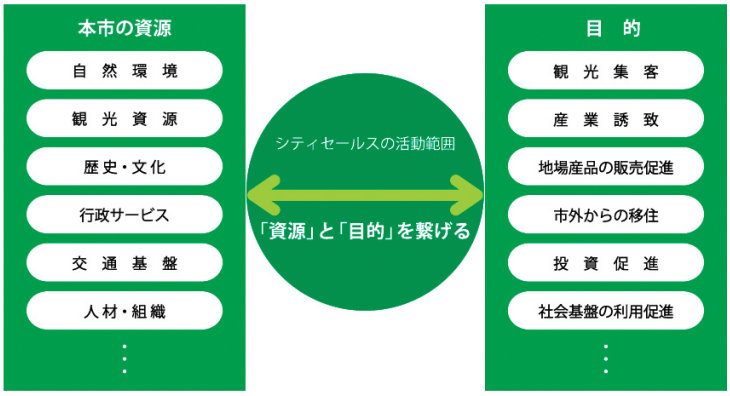
地方都市にありがちな豊かな自然や食文化を体験してもらい観光客を取り込むことや特産品の販売を目標とするのではなく、市民自らが自分のまちを見つめ直し新たな価値を創出し「訪れたいまち」「住みたいまち」「住み続けられるまち」を目指すものである。

市の産業・経済基盤となっている「原発」にとらわれない都市づくりは原発立地地域の共有する将来的な課題であり柏崎市のシティセールスはその試金石でもあると言えよう。

柏崎シティセールス推進協議会、運営委員会では先導的事業として、２０１５年度に「ＴＨＥ★オール柏崎プロジェクト」市民による市民のためのシンボルマーク総選挙を実施し、公募による作品３３２点を推進協議会で審査し、５作品を候補作品に絞り、市内90カ所に設置した市民投票、インターネット投票（投票数約１万７０００票）で決定した。

また、今年３月に東京・秋葉原で「ＴＨＥ★オール柏崎大交流会」を開催し、柏崎方式の市民型シティセールス活動を市内外に発信、活発化させている。

【シティセールスの全体像】



地形や地域資源を生かしたユニークな柏崎の市民スポーツ

柏崎市は長い海岸線と米山刈羽三山の豊かな水系に恵まれ「海のスポーツ・レジャー」や「水のスポーツ・レジャー」が盛んである。

柏崎は15の個性的な海水浴場があり、鯨波海水浴場、青海川海水浴場は「日本の渚・百選」、番神海水浴場、ウェストコート柏崎は「快水浴場百選」に選ばれ、北関東、甲信越からの海水浴客で賑わう重要な観光資源でありスポーツ・レクリエーション拠点だ。

柏崎港観光交流センター夕海（ゆうみ）は水上オートバイ、プレジャーボート、フィッシング、柏崎マリーナはクルージングやフィッシングの海洋拠点である。変化に富んだ海岸や海水浴場の地形や特性を生かし、ビーチサッカー、ライフセービングなどライフスタイルや嗜好の選択肢が多い。新潟県初の「海の駅」では「全国ご当地どんぶり選手権」でグランプリを獲得した「鯛茶漬」を始め、新鮮な魚貝類や地元の食材が楽しめる。

柏崎のスポーツレジャーを代表する２つの事例を上げたい。

・オリンピック代表を輩出した柏崎の水球

２０１６年リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックの出場権を32年ぶりに獲得した水球日本代表男子のナショナルテーム「ポセイドンジャパン」主将の志水祐介選手、メンバーの筈井翔太選手、棚村克行選手、保田賢也選手ら４人は併せてブルボンウォーターポロクラブ柏崎（ＢＯＵＲＢＯＮ ＫＺ）の選手であり「水球のまち柏崎」の知名度、イメージアップに大きく貢献した。

柏崎の水球は社会人チームＢＯＵＲＢＯＮ ＫＺを頂点に、大学、高校、中・小学校と広い据野のピラミッド構造を持ち、中・小学校では授業の一貫として水球を行うなど水球を通した体力向上やスポーツ振興、選手の育成などを図っている。

また、行政、学校、教育、地元企業、市民のサポートによるいわば、水球スポーツコミッションを形成し、全国からの水球、水泳等の合宿の誘致を行っている。

「水球のまち」を形成する核施設が柏崎アクアパークの日本水泳連盟公認プール（50メートル×25メートル水深2メートル）である。３月下旬～10月上旬に水球をはじめ水泳、シンクロナイズドスイミング等で使用し、冬はアイスホッケー国際規格のリンクとしてアイスホッケーやカーリングの練習場などとしてオールシーズン活用されている。

施設特性を生かし全国の水球や水泳の大会や試合を誘致すると共に各種教室や合宿の誘致を行い柏崎の交流人口、滞在人口を生み出している。

・地域ぐるみのユニークな演出とおもてなしの柏崎潮風マラソン

柏崎市を代表する「柏崎潮風マラソン大会」は地域ぐるみのユニークな応援演出とおもてなしで２０１５年の全国ランニング大会１００撰で人気上位の高得点を得ている。

全国ランニング大会100撰は、国内で開催されたランニング大会の中から参加ランナーの投票で選ばれ、ランナーを第一に考えた大会運営や個性が光る大会、ランナーの満足度に主眼が置かれ評価されるユニークな100撰である。日本のマラソン大会で最大規模の「東京マラソン」や伝統的な市民マラソンの「青梅マラソン」なども含まれている。

評価は①インフォメーション（事前の大会情報、スムーズなエントリーなど4項目）②会場（会場案内やトイレ等のサービスなど5項目）③スタート・コース・フィニッシュ（スタートエリアの管理、コースの走り易さ、楽しめるコース設定、応援、配水等の7項目）④記録・表彰（計測ポイント、年代別表彰区分等の4項目）⑤全体の感想（熱気や活気、地域の特色、コストパフォーマンス等の4項目）で総合得点100満点で評価され、「柏崎潮風マラソン」は96・4点を獲得した。特にホスピタリティや海岸線の変化に富んだコース設定、沿道のコミュニティーによるユニークな応援演出、工夫されたおもてなしに人気と特徴がある。



赤絨毯のゴールでは1人1人のゼッケンナンバーが読み上げられ、声援と拍手で讃えられる

全国40都道府県から3000人以上の参加者（2015年実績）を数え、海岸線～田園～野山へと起伏と変化に溢れるコースで、エントリー競技は「フルマラソン」「ハーフマラソン」「5キロファンラン」「12キロウォーク」「わんぱくひよこの部」など多様な世代が参加。コース上に名物スポットを設置し、柏崎の祭りの神太鼓、おもしろ看板、峠のサル茶屋などユニークで楽しい応援や、仮装だらけの配水ポイント、たけのこ汁のサービス、子供会エイド、フラワーガール、サックス演奏など市民・ボランティアのおもてなし競争で市民そのものがマラソンをサポート、自らも楽しんでいる。ハイライトは赤絨毯を敷いたゴールで参加ランナー全員のゼッケン番号を読み上げ「お帰りなさい」コールを送る。ランナーの満足度の高いランニングマラソンとリピーターも多く柏崎のファン獲得などの効果も大きい。

地域資源を生かしたスポーツイベントが地域を活性化する

スポーツ、レクリエーション、運動や遊び、更には一次産業やサービス産業、環境活動等も競技化・スポーツ化することで地域の活性化につながる。

1930年代のパリカフェのギャルソンが盆にグラスを乗せて優雅に走るウェーターズランナーはヨーロッパ全土に広がり、現在は横浜でも開催され、国際都市横浜のイベントとして話題となり、横浜の新たな観光コンテンツとなっている。

公益社団法人スポーツ健康産業団体連合会と一般社団法人日本スポーツツーリズム推進機構の「スポーツ振興賞」のスポーツツーリズム賞、スポーツとまちづくり賞にはユニークなスポーツイベントが受賞している。

「一般社団法人日本スポーツGOMI拾い連盟」の「ゴミ拾いはスポーツだ」は地域で行われているゴミ拾いとスポーツを融合させた競技であり、「ウルトラトレイル・マウントフジ実行委員会」の「10市町村が連携―日本最大100マイルトレイルレース」は、富士山麓、登山道、歩道、林道を走るレースで参加者と市民、ボランティアの交流の場として地域産品を提供し、海外メディアでも取り上げられ話題となった。

大型の国際スポーツイベントの経済効果が注目を浴びている。しかし、地方の市町村でのスポーツによる効果は、健康づくりや生きがいづくり、コミュニティーづくりなどの社会効果に軸を置き、その市町村資源である自然、歴史、産業、技術、生活、文化等を活用した競技化、スポーツ化を行う視点が大切であり、資源を生かすことがオンリーワンのスポーツイベントを生み出す。外部からの参加者が生まれることでネットワーク化や交流が進み、まちに人々が訪れることで経済効果、起業化、産業化効果が創れるものである。一つでも多くの地域がオンリーワンのスポーツイベントを創出することを願っている。

楽しむスポーツイベントによる地域活性化

北海道滝川市

ゆっくり走って地域住民との交流や自然を体験
―住民と景観が育てる新スポーツ「マラニック」―



滝川市教育委員会社会教育課スポーツ振興係主事 ● 木村 直也

◆◆◆「日本で最も美しい村」を舞台に

滝川市は、札幌市と旭川市のほぼ中間に位置し、交通の要衝として栄えてきた人口約4万1千人の中空知地域の中心都市で、北海道を代表する味覚「味付けジンギスカン」発祥の地として有名です。

マラニックの開催地である江部乙地域は滝川市の北部に位置し、稲作や農作物の栽培が盛んな地域です。なだらかに連なる丘陵地には、日本一の作付面積を誇る菜の花畑や防風林に囲まれたりんご畑があり、人々の歴史と暮らしが生み出した景観や地域資源が評価され、平成27年10月、NPO法人「日本で最も美しい村」連合に加盟しました。「日本で最も美しい村」連合は、小さくても素晴らしい地域資源や美しい景観をもつ村の存続を目指して設立されたもので、今回の加盟により、全国的に江部乙地域の魅力が発信されることが期待されます。

◆◆◆マラソン＋ピクニック＝マラニック！

近年、全国各地でジョギング・マラソンの参加人口の増加や健康志向の高まりなどを背景にランニング大会が数多く開催されています。

競技的なランニング大会が増えていく一方で、幼児や高齢者などが気軽に参加できるランニング大会は決して多くありません。

「老若男女を問わず誰もが気軽に参加できるスポーツイベント」を市民に提供すべく模索していた中で辿り着いたのが「マラニック」というスポーツでした。

マラニックは、マラソンとピクニックを合わせた造語で、ゆっくり走ったり・歩いたり、時には立ち止まって周りの自然や風景、そして人々と触れあいながらゴールを目指すというスポーツです。順位やタイムを計測したりしないので、レクリエーション的なスポーツとして誰でも気軽に参加することが出来ます。

また、スポーツ体験の促進だけではなく、その土地でなければ体感できない地域の景観などを生かした観光体験や、参加者同士だけではなく、地域住民との交流といった交流体験など様々な体験活動をもたらす手段としての役割も期待されています。

当市では江部乙地域の丘陵地帯を活かしたマラニックを昨年5月に初めて開催しました。市内外から260



笑顔でスタート



老若男女を問わず参加

人の参加があり、幼児から高齢者まで幅広い世代の方に参加していただきました。

「創る」のではなく「築く」

えべおつ丘陵地マラニックでは「江部乙丘陵地を五感の全てを使って楽しんでもらう」ことをコンセプトとしています。

コースは舗装道路だけでなく、砂利道、草地、残雪などの上を通り、菜の花畑や森林に囲まれた道を、春の匂いを感じながら各々のペースで駆けていきます。普段は人があまり行き来しない場所もマラニック開催中は楽しげな雰囲気に包まれます。

また、コース途中に休憩ブースを設け、参加者に給水や応援などを行っています。さらに、休憩ブースごとに「おみやげ」として地元の味覚を味わってもらいます。昨年の大会では、江部乙産リンゴを使った「リンゴジュース」や、地元商店が作っている洋菓子「スコーン」、地元産の野菜として「アスパラ」などを参加者に配布しました。参加者からは「江部乙にこんなに美味しいジュースやお菓子があるとは思わなかった」「おみやげについてもっと詳しく教えてほしい」などといった嬉しい声を聞くことができました。

その休憩ブースは、地元住民の皆さんに担当していただきました。遠方からやってきた気さくな参加者たちと笑顔で言葉を交わし、飲み物・おみやげを提供し、「がんばれ～！」と大きな声で応援されている姿があちこちで見られました。

「参加する」側と「支える」側の両者が一体感を共有しながら笑顔になれる…これもマラニックの楽しさの一つです。

マラニックが新たな地域の魅力を創りだすのではありません。地元住民がマラニックの参画を通して、美しい景観や美味しい地産品、そして人々の温かさ…、これまで当たり前だと思っていた地域資源や住み慣れた場所が、魅力に溢れていることに気づき、地域への自信と誇りを持ち、その魅力を伝え築いていく。このことが、マラニック開催の大きな役割であると考えています。



休憩ブースで地元の味覚を味わう



最後尾の人も笑顔でゴール

地元の住民が主役になるイベントを目指して

いわゆる「村おこし」イベントとしてのランニング大会は、大都市近郊から、限界集落まで多くの市町村で開催されています。大会による地域貢献は、経済的な部分だけではありません。町の知名度を上げる、観光客を誘致する、ボランティア等を通じて住民の意識の高揚を図る、これらのことがあって、地域の活性化の期待が膨らみます。

大会の成功、不成功の判断基準は、参加者の大会への満足度やリピーター率というものによって測られることが多いですが、そういった外的尺度だけでなく、住民の意識や行動の変化、住民の満足度、住民の町への意識の変化といった内的な物差しで測られることこそが、地域の活性化の本質ではないでしょうか。

私たちは、マラニックという新しいスポーツを通じ、「日本で最も美しい村」に暮らす地域の皆さんが、参加者のサポートや沿道での応援など主体的に大会を支え、誇るべきふるさとの魅力を伝える一方で、参加した皆さんは体と心でその魅力を受け取ることができる、そういうスポーツイベントに育てていきたいという大きな夢を描いています。マラニックの精神のとおり、立ち止まって周りの自然や風景をながめ、地域の皆さんと触れ合い話し合いながら、地域づくりのゴールを目指したいと思います。

楽しむスポーツイベントによる地域活性化

新潟県魚沼市

豪雪を生かしてスポーツ雪合戦
―地域の交流・活性化や観光資源にも―



魚沼市商工観光課 ● 渡部 麻美

いざ決戦の地へ！

「投げて投げて投げて、ぶつけろ～」と、魚沼市の雪のコロシアムにおなじみのメロディーが響き渡る。「あんさ&おっさ」という地元出身のユニットが歌うこの歌は、28年間続く小出国際雪合戦のテーマソング。開会式で流れるこの歌を皮切りに、いよいよ雪合戦の戦いの幕が上がる。

山紫水明・豪雪のまち、魚沼市

小出国際雪合戦は、毎年2月に県立奥只見レクリエーション都市公園「響きの森公園」で開催される雪合戦の国際大会です。会場である魚沼市は新潟県の南東部にあり、「おかずがいらないほどおいしいお米」魚沼産コシヒカリの産地や、日本有数の豪雪地帯として知られています。東京駅から上越新幹線で約1時間半、関越自動車道で小出ICまで車で約3時間と、関東からアクセスが良く、雪合戦の参加者には関東の方も多く見られます。冬は一面に広がる雪景色、春から夏にかけては魚沼から行く尾瀬国立公園、秋は奥只見湖の遊覧船からの紅葉と、四季の魅力に溢れたまちです。また湯之谷温泉郷を中心とした個性豊かな温泉にも恵まれ、多くの観光客が訪れます。

小出国際雪合戦の発祥

国内で開催される雪合戦大会は、主なものだけでも昭和新山国際雪合戦、長野県白馬村の日本雪合戦選手権大会など多くありますが、小出国際雪合戦は、その中でも特に歴史が長い大会として知られており、平成28年で第28回の開催を迎えました。

第1回大会を開催した平成元年に「地域の元気を掘り起こそう」という狙いの元、魚沼ならではの雪を使ったイベントができないかと、地域の若者と市役所の職員が中心となって発案されたのがこの小出国際雪合戦でした。子どもの遊びである雪合戦をどのように大人が楽しめるスポーツにするか、知恵を出し合いました。その取り組みは大きく注目され、NHKの密着取材が行われたり、2時間特集番組が放送されたりと、メディアの力を借りて全国的に一気に知名度を上げました。この記念すべき第1回は、少雪によりダンプカーなどで雪を会場に運びこんだことでようやく開催にたどり着き、伝説の第1回大会となりました。



魚沼の自然　銀山平滝雲

それから参加者数は増加の一途をたどり、第28回大会においては、大人の部186チーム、子どもの部21チームと、約1000人が選手として参加しています。参加チームの募集を開始してから約1週間という早さで200チームの枠はほぼ埋まり、キャンセル待ちのチームが後を絶たないほど、魚沼の冬を彩る人気イベントとなりました。

地域への思いを形に

すでに集客力のあるイベントではありますが、運営の主体である小出商工会青年部は更なる向上を目指し、例年、約半年前から毎週のように運営会議を重ねています。今年の雪合戦委員長を務め

た青年部員の今井清司氏は、「28年も続くイベントを取り仕切ることに、少なからずプレッシャーのようなものはあった」と、委員長として務めた1年について語ります。今年も第1回大会同様、例年にない少雪で開催自体が危ぶまれましたが、周辺の雪を会場内に入れることでどうにか開催することができました。加えて今井氏の発案により、今年から決勝トーナメントではコート内の盾の数を減らして白熱した試合展開となるような工夫をしたり、ヘルメットの着用を義務付け、安全面への配慮をさらに重ねたりしました。今井氏は「雪合戦はその当日だけのイベントではない。若者なりの地域への思いを形にしたかった」と話します。その思いは、約10年前から始まったWE LOVE SNOWBALL FIGHTキャンペーンという商店街の活性化企画にも活かされています。

◆◆◆ 地元商店街と連携

WE LOVE SNOWBALL FIGHTキャンペーンとは、魚沼市全体を巻き込んだ抽選会の企画です。雪合戦前の約2週間に、小出商店街を中心とした提携店で買い物をするともらえる抽選券3枚で、雪合戦会場で豪華景品が当たる大抽選会に参加できる仕組みとなっています。第28回大会では40店舗、3団体、3施設の協力がありました。抽選会の商品も、地元の特産品の商品券等が中心となり、経済効果を生み出しています。当日は地元企業を中心に「うまいものストリート」と称した露店市が並びますが、この露店でも同様の抽選券を受け取ることができます。この取り組みによって地域住民が雪合戦会場に足を運び、また商店街が一丸となって雪合戦を支える仕組みができました。例年この企画は盛り上がりを見せていますが、参加店舗の増えた今年は例年以上に大盛況でした。

◆◆◆ 魚沼ファンになる、前夜祭の魅力

「雪合戦は当日だけではない」と今井氏が話すように、前日には「前夜祭」と呼ばれる交流会が開催されています。この交流会には、選手だけではなく、地元住民も参加し交流を図ります。かつては雪合戦にちなんで「酒合戦」と呼ばれ、会の最後には肩を組みながらの大合唱が恒例となり、相当な盛り上がりを見せています。例年出場している選手の中には前夜祭に参加するために雪合戦に来るという方も多く見られるほどです。前夜祭への参加は宿泊客の増加にもつながっており、今年は約250人が魚沼市内の宿泊施設を利用しました。選手も、地元の人も、心から楽しめるこのような交流こそが、魚沼ファンを増やすことにつながっています。

◆◆◆ 地域のことを考えるきっかけに

魚沼市は、6町村が合併し今年で市制11年を迎えます。現状ではこの雪合戦も他のイベント同様、旧町村ごとの特色が強いですが、いつかその垣根を越えて、魚沼市の若者全員が関わるイベントに昇華させていくことが今後の課題となります。県立小出高校野球部の生徒が10年前からボランティアで参加してくれているように、このイベントを通じて自分の地域について考えることが、地方創生の地域活性化への第一歩につながるはずです。来年の国際雪合戦は、コート数を増やし、参加チーム数も増やし、さらに楽しめる企画を用意して皆様をお待ちしております。ぜひ一度、冬の魚沼へお越しください。



国際雪合戦会場の様子



国際雪合戦



雪合戦を盛り上げるコスプレコンテスト

楽しむスポーツイベントによる地域活性化

静岡県伊東市

地元高校生考案の「まくら投げ」が人気イベントに！

―伊東温泉で全国大会を開催、ネットに動画をアップ―



伊東市観光課企画宣伝係　主事兼まくら投げ主審　●　栗原　扶美代

当市が全国で初めてまくら投げを競技化するきっかけとなったのは、平成22年10月に開催された、高校生の斬新な発想力を競い合うプレゼンの全国大会「デザセン２０１０（全国高等学校デザイン選手権大会、主催：東北芸術工科大学）」で、地元の伊東高校城ヶ崎分校の生徒が考案した「まくら投げのすすめ」が、準優勝・市民賞・高校生賞を受賞したことです。

伊東高校城ヶ崎分校は、同大会の常連校で、当時、指導を担当していた大津忍先生にお話しを聞いたところ、プレゼンの題材を決める方法として、生徒でしりとりを行い、たくさんのワードを出し、その中でおもしろそうなワードを題材にしているとのことでした。「まくら投げ」を題材として決定したのには、①嫌なことを忘れて夢中で枕をぶつけ合う充実感がストレスの多い現代人に必要②子供から大人まで誰でも楽しめる③地元伊東市が温泉地でもあり地域おこしも期待できる、という生徒達の想いがありました。

◆◆◆伊東温泉に全国から57チームが参加

修学旅行の思い出といったら「まくら投げ」を思い浮かべる人が多いのではないでしょうか。そんな懐かしさも感じる「まくら投げ」を当市では、スポーツとして競技化し、平成25年から全国大会を開催しています。

平成28年2月27日、28日に開催した「第４回全日本まくら投げ大会ｉｎ伊東温泉」には、北海道から鹿児島県まで、日本全国から57チーム、約４５０人が参加し、日本一の称号を得るために、白熱した試合が繰り広げられました。

たかがまくら投げと思いきや、選手の皆さんは真剣そのもの。試合開始の合図とともに力いっぱい枕を投げ合い、飛び交う枕をよけながら繰り広げられる真剣勝負は、見る人も魅了しました。

◆◆◆地元高校生が考案した「まくら投げのすすめ」

「まくら投げのすすめ」の提案を踏まえ、特に若者への当市の認知度アップや伊東温泉の魅力を発信するために、新たな観光イベントとして、まくら投げの競技化を進め、平成25年2月に「第１回全日本まくら投げ大会」を開催しました。

第１回大会では、「まくら投げのすすめ」で提案された内容から大将戦を採用し、一般の部（６チーム）、子供の部（６チーム）、大学対抗の部（６チーム）の３部門で開催しました。

年々人気が上昇し、出場希望者が増えてきたことをふまえ、第４回目を迎えた今年、一般の部

◆◆◆まくら投げ大会の実現



全日本まくら投げ大会開会式の様子（一般の部 48 チームが参加）



一般の部決勝戦の様子



勝利に歓喜する選手たち

（48チーム）、子供の部（9チーム）の2部門で、2日間開催とし、より多くの人が参加できるように大会の規模を拡大しました。

◆◆◆ 綿密に考えられたルール

会場は、修学旅行でのまくら投げに近い雰囲気を出すため、体育館に畳を敷き、選手は浴衣を着用します。基本的なルールは、1チーム8人編成（内選手5人、サポート3人）で、各チームの中から大将を1人決め、ドッジボールのようにそれぞれのコートに分かれて枕を投げ合う「大将生き残り戦」です。つまりは、枕を投げ合って大将に当たるか、終了の合図の時に残っている選手の数で勝敗を競います。

この「まくら投げ」の難しいところは、枕をキャッチしてはいけないところ。枕が目の前にくるとついつい、キャッチしてしまいがちですが、キャッチすると「アウト」になってしまいます。

そして、試合を盛り上げるユニークなルールとして、「先生がきたぞ～！」コールがあります。各チームが1試合の中で1回だけコールすることが出来ます。このコールを宣言されたら両チームの生き残っている選手は、10秒間正座をし、その間にコールをしたチームの大将が相手の枕を回収することができる、一発逆転も可能な「必殺技」です。

また、布団を壁にして相手側の攻撃を防ぐことのできる防御専門の「リベロ」を作るなど、「まくら投げ大会」をよりよいものとするために、できるだけ本来のまくら投げに近い雰囲気を残しつつ、「もっとこうしたほうがおもしろい」など、出場者が楽しめるようルールを、まるで自分たちが出場するかのように、楽しみながらアイディアを出しあい考案しました。第3回から基本のルールを確立し、各選手の分担、コートの規格、相手の倒し方、防御方法、大将の動きなどを細かく設定し、体力のみならず戦略も勝敗を分けるポイントとしました。

ルールについては、出場者がわかりやすいように、市職員のボランティアにより、実践形式での動画を作成し、Ｙｏｕ Ｔｕｂｅにアップしました。動画をインターネット上にアップすることで、ルールを研究して大会に挑むチームもあり、また大会の認知度も増しています。

◆◆◆ 地域に根付くイベントとなるように

まくら投げをスポーツとし、白熱した試合を繰り広げた結果、選手は、相手チームを称え、観客は拍手や声援を送る。そんな一面も見られました。選手同士の絆が生まれ、互いに来年もまくら投げ大会に参加し、再戦を誓い合うチームも。このように、スポーツを通して生まれる絆を大切にし、交流の輪が広がっていくことを期待します。

そして、まくら投げ大会がきっかけとなり、伊東を知る人、伊東に来てくれる人が増えることは、この大会を主催する側としては大変喜ばしいことです。この「全日本まくら投げ大会・ｉｎ伊東温泉」が地域に根付くイベントとして、活力ある地域づくりの一環として、更なる躍進を続けていけたらと思います。

スポーツフィッシングで地域振興
―ルアー釣りやカジキ釣り、海を活かした「まちづくり」―

和歌山県すさみ町



マリンスポーツフェスティバル実行委員会委員長
すさみ町観光協会会長
● 朝本　紀夫

◆◆◆ 古くからの釣りの町

マリンスポーツ振興に取り組んだのは平成7年です。当時、地元商工会青年部が地域活性化に「イノブタダービー」を実施、2万人前後の来訪者があり一定の効果がありました。しかし、1日だけの一過性ということで、年中経済効果が期待できるものとして取り組んだものです。

すさみ町は古くから釣り（主に磯釣り）の盛んな町で多くの釣人が訪れていました。私は24年間共同経営してきたバス・タクシー事業から身を引き、平成5年新たに起業したのが「体験釣り事業」でした。それも、従来の釣りでなく新たな釣りとしてルアー（疑似餌）釣りやカジキ釣り（ビルフィッシュ）体験など、スポーツフィッシングを進めることとしました。船も漁船でなく小型クルーザーを購入。当時、近隣の釣具店にはルアー用品は販売されてなく大阪からの購入でした。当然、和歌山県内にルアー船もなく、また、釣りをするにあたってポイント（海底の岩礁等）探しが重要ですが、そのポイントも簡単には教えてもらえず、独学で300ポイント余設定といろいろ苦労しました。

◆◆◆ 体験観光漁業としてスタート

ルアー釣りは、ルアーを海底に沈めシャクリ上げる釣り方で、エサも撒餌もいらず、ヒットすると強烈な引きの体感があり、何とも言えない醍醐味です。この体感をぜひ、多くの方に味わってもらいたい！何とか情報発信したい！当時はパソコンもなく、唯一写真を、近畿圏内のショップ50～80店舗へ月2～3回のペースで発信し続けました。この体験釣りを地元漁業者向けの体験観光漁業として漁業振興に生かせないかと取り組んだのが、平成7年のオフショアトーナメントであり、宿泊、燃料、飲食、物販の経済効果が見込めるビルフィッシュトーナメントでした。

◆◆◆ オフショアトーナメント（ルアー釣り大会）

エサも撒餌も使わないルアー釣り。「そんなもんで魚が釣れりゃ、漁師は苦労しない！」と言う漁業者に当然ながらルアー釣り経験は全くなく、3年間ルアー釣りDVDを見せ研修を行いました。しかし、なかなかうまくいかず、その都度漁協へ改善要望を行ってきました。大会事業費は、町からマリン4部門（オフショア、ビルフィッシュ、磯釣船釣、海の感謝祭）で90万円の補助があり、これを元に、パンフチラシの作成や、毎年2月に大阪フィッシングショーでメーカーへの協賛依頼を兼ねたPR活動などを行います。大会時には、漁船1隻あたり5～6人乗船し、5～6万円のチャーター料を支払います。通常、大会は15～17隻で行い、多いときは30隻を超えるときもあります。狙いは、大会だけでなく、通年の体験者



ルアー釣り大会で釣れたカンパチ

の増加です。その成果は顧客化し、多数の漁船が出港しています。長年、すべて実行委員会任せで漁業者は企画運営してこなかったのですが、昨年ようやく地元若者漁業者等から自主運営したいとの申し出があり、20年目にして初期の目的が達成でき実行委員長の世代交代をすることができました。交代後の第21回大会でも190余人で関西屈指の大会となり、マグロ狙い！アオリイカ狙い！等々新たな分野でも着実に成果を上げ大いに期待しているところです。

◆◆◆ビルフィッシュトーナメント（カジキ釣り大会）

オフショアの狙いは漁業振興ですが、ビルフィッシュは、宿泊、飲食、物販、燃料等地域振興全体が狙いです。漁船でなくオーナーボートの大会であり、漁港を占拠するので漁協の承諾が必要となります。交渉にあたって「クルーザーと衝突でもしたら大変なことになる」など抵抗も多く苦労しましたが、何度もの交渉の末、協力金の支払い等で承諾にこぎつけました。実行委員会には、漁協、すさみ町、観光協会、商工会、宿泊関係、運営経験者（大阪）、民間有志等に参画いただき、私が委員長に就任。事務局は観光協会で断られ商工会で落着きました。



釣り大会後の懇親会



多くの釣り船が係留された港の様子

狙いは地域振興であり、1人でも多く参加しやすい運営を目指してきました。県下でも、勝浦、串本大会は5～7年前から開催しており、スポーツフィッシングのルールが適用されていましたが、超大物（3メートル、100キロ級）は度々釣上がるものでなく、ルールを少し緩くしたローカルルールと正規ルールの2本立てで実施することにしました。第3回大会の時、大手協賛企業から「JGFAの後援を取付けるよう」進言がありましたが、参加者の85％は、すさみ方式のローカルルール希望のため、お断りすると協賛をすべてカットされました。さらに、漁協理事の一人が「こんな大会止めさせてやる！」という一幕もあり、「漁協の総意ならば文章で提出してください」「即止めます。但し、漁協関連事業（鰹ブランド化、オフショア、体験漁業）も一切止めます」と回答すると、他の理事から「大会は継続してほしい」旨の謝罪があり、漁業者との共存共栄に成功。試行錯誤の20年でありました。

成果としては、大会含め、シーズン（6～9月初）で億を超える経済効果があり、日本で1～2の大会規模に成長しました。

大会運営は40～50人のスタッフで、町職員、観光協会、商工会、摂南大学、NPO、民間等全てボランティアです。行政の理解と関係団体のご支援に感謝申し上げます。

◆◆◆女性アオリイカ釣大会なども計画

20年間事務局として支援頂いた商工会が職員削減で昨年は中止せざるを得なくなり、今年は観光協会で担当することになりましたが、常駐1人の厳しい状況です。

そうした中で、ルアー釣り大会やカジキ釣り大会以外、ミニボート釣大会、女性アオリイカ釣大会、磯釣船釣大会、障がい者向けバリアフリー祭り等々いろいろと計画しています。過疎・高齢化の中、「何とかしなきゃ！」と日々奮闘しているところです。

楽しむスポーツイベントによる地域活性化

鳥取県湯梨浜町

小さな村から生まれたスポーツを全国へ

―小学生がグラウンド・ゴルフ発祥の地に集結―



湯梨浜町企画課まちづくり推進係　主事　●　東原　正治

◆◆◆ 第10回ジュニアグラウンド・ゴルフ発祥地大会

鳥取県湯梨浜町（旧泊村）のグラウンド・ゴルフのふる里公園「潮風の丘とまり」は日本海を見下ろす絶景のロケーション。全面芝張りの専用コースはグラウンド・ゴルフの聖地と言われ、年間を通じて数多くの大会が開催されており、全国から多くのプレーヤーが訪れます。グラウンド・ゴルフの愛好者は高齢者が多く、いつもはこの公園を訪れる方の年齢層も少し高めですが、毎年8月に行われる「ジュニアグラウンド・ゴルフ発祥地大会」の日は違います。

平成27年8月1日、第10回となるジュニアグラウンド・ゴルフ発祥地大会の開催日、この公園には北は東北から南は九州まで、全国から116人の小学生プレーヤーが集結。暑い日差しが照りつける中、「山梨すずらんチーム」の選手宣誓で始まったこの大会で、子ども達は真剣な眼差しでゴールポストを見つめ、ある時は気合を込めて、またある時は慎重にクラブを振っていました。

ホールインワンをした子どもは嬉しそうに笑顔を見せ、打ち損じてしまった子はくやしそうに肩を落とす。この日、子ども達は全国の友達と、グラウンド・ゴルフを通じて交流を深めました。

◆◆◆ 湯梨浜町から生まれたグラウンド・ゴルフ

昭和52年、湯梨浜町の泊地域（旧泊村）では、総人口の2割以上が60歳を超える実情に合わせて、高齢者向けのスポーツおよびプログラム開発という課題に取り組みました。設立された専門委員会は、たまたま大学生がグラウンドに描いた白線の輪を狙って、ゴルフクラブでボールを打っている様子をヒントにグラウンド・ゴルフの開発に着手しました。この年の10月に、用具やルールなどがほぼ完成。翌年には、マスメディアの全国報道を受けて問い合わせが殺到しました。

ルールは簡単、高度な技術は不要。全力を出す場面と集中力や調整力を発揮する場面がうまく組み合わされているグラウンド・ゴルフは、瞬く間に普及して3000万人以上の方が楽しむ国民的なスポーツとなりました。



ジュニアグラウンド・ゴルフ大会の全景



ジュニアグラウンド・ゴルフ大会の様子

◆◆◆ グラウンド・ゴルフを子ども達に

全国的な広がりを見せるグラウンド・ゴルフは、体育の授業や国体の公開競技に採用される一方で、愛好者の高齢化という問題を抱えています。そのため、日本グラウンド・ゴルフ協会や各都道府県協会は、世代間交流大会や活動の助成などでジュニア世代の育成や普及に力を注いでいます。

このジュニアグラウンド・ゴルフ発祥地大会も、もともとは鳥取県内の世代間交流大会からスタートしました。大会に参加した子ども達の「グラウンド・ゴルフは楽しい」「いろんな友達とこのスポーツを楽しみたい」という声に後押しされ、全国から参加者を募る大会に発展したのです。

なるべく沢山の方に参加していただけるよう、日本グラウンド・ゴルフ協会の支援を受けながら、県外からの参加者には旅費の一部助成を行っています。また、大会後のゲームやイベント等、小学生が楽しめる内容を工夫しながら大会運営を行っています。



大会後のオプショナルイベント「サザエ採り」



大会後のオプショナルイベント「船上魚釣り」

◆◆◆ オプショナルイベントで発祥の地を感じる

例えば、毎年、大会の翌日はオプショナルイベントとして、「サザエ採り」と「船上魚釣り」を行っています。

今年のサザエ採りでは、海岸に撒いた１７０㎏のサザエを子どもが海に潜って採りました。会場ではサザエのバーベキューも行い、サザエのつぼ焼きを初めて食べたという子どももいました。「毎年、ここで泳ぐのが私たちの海開き」と東北から参加した子どもが言いました。

船上魚釣りでは、初めて乗る船にみんな興奮気味でした。途中、船酔いで気分が悪くなった子どももいましたが、みんな港に戻ってからも堤防で釣りを楽しんでいました。

どちらのイベントも、毎年、子ども達が来るのを楽しみにしている地元の漁協や住民の協力が欠かせません。

サザエ採り会場の小浜海岸ではイベント前に住民が海岸の清掃活動を行います。船上魚釣りに船を出す漁師さんは、よく釣れるポイントの下調べをしています。子たちに楽しい思い出を作ってもらいたい。グラウンド・ゴルフ発祥の地を肌で感じてほしい。そんな地元住民の思いで、イベントは成り立っています。

◆◆◆ グラウンド・ゴルフを世界へ

この地で生まれたスポーツが、これからもみんなに親しまれるためには子ども達にプレーしてもらうのが一番ですが、私たちがジュニア世代の普及を目指す理由はそれだけではありません。グラウンド・ゴルフというスポーツには審判がいません。審判はプレーヤー自身です。ジュニア世代への普及促進には、子ども達にルールを守って行動する習慣や、プレーする仲間を大切にする心を身につけてほしいという願いも込められています。

また、町では、２０２１年、東京オリンピックの翌年に関西を中心に開催されるワールド・マスターズ・ゲームにおいて、「潮風の丘とまり」でのグラウンド・ゴルフ世界大会開催を目指すとともに、グラウンド・ゴルフの国際化に努めています。

子ども達がここで楽しんだグラウンド・ゴルフを世界中で多くの国の人とプレーしたいと思ってくれること、そしてこの町の思い出とともに国際化の一翼を担ってくれることが大会に携わるみんなの夢です。

移住・定住・交流推進支援事業

（茨城県常陸太田市）

地区文化財の酒蔵を活用して交流拠点整備

―地域外の人も含めた新しい形の「地域コミュニティ」が集う場―



折橋芸（能・農）部（折橋地域活性化プロジェクトチーム座長）●菊池　竹一

都市から地方への移住・交流は、人口減少社会における地域活性化策の柱として期待される。地域活性化センターでは、「移住・定住・交流推進支援事業」として、地域団体もしくは市町村等が自主的・主体的に実施する、都市住民などを受け入れる事業を支援している。

今回、平成27年度に同事業を活用した茨城県常陸太田市の取り組みを折橋芸（能・農）部（折橋地域活性化プロジェクトチーム座長）菊池竹一氏にご紹介いただいた。

（企画・コンサルタント業務課）

常陸太田市と折橋町

常陸太田市は、茨城県の北東部にあって県都水戸から20㌔、東京から120㌔圏に位置しています。

平成16年に金砂郷町、水府村、里美村を編入して、県内最大の自治体として再スタートしました。人口は5万1749人（平成28年3月1日現在）で、高齢者率が約32％と高く、少子高齢化が急速に進んでいる地域です。折橋町は、市の中心部からさらに北へ25㌔の地点に位置する原風景の残る里美地区（旧里美村）の集落の一つです。

折橋芸（能・農）部とこれまでの活動

折橋芸（能・農）部は、過疎化や高齢化が進み、元気がなくなりつつある里美地区に危機感を持ち、地域を元気にしたいという思いで、平成10年に折橋町の有志11人で立ち上げた任意団体です。

能（民舞）を習い、地域の敬老会で披露しています。また、農業では遊休地を借り上げ、蕎麦や小麦を栽培しています。収穫した蕎麦を年越し蕎麦として折橋町宿上地区34戸に無料配布するなど、もっぱら里美地区内で活動をしていました。

活動が地区外へと踏み出す転機となったのが、平成23年3月に発生した東日本大震災でした。被災した子供たちを元気付けようと、同年7月に気仙沼市内の保育所へカブト虫1千匹をトラックで届けたことが、その第一歩でした。今でもこの活動は続いています。

大きな災害もなく、過ごし易い気候と自然が沢山残っている里美地区。カブト虫の活動を通して改めて気づいたこの地域の魅力をもっと知ってもらおう、そして、沢山の人に来てもらおうという思いで、交流施設「カブト虫の里」を平成24年7月にオープンしました。

新たな地域活性化計画の始動

「カブト虫の里」の運営は、開園期間が夏季の1カ月と限定されていることもあり、年間を通しての交流人口の拡大にはなかなか繋がりませんでした。そんなときに「移住・定住・交流推進支援事業」の話を聞き、そこで50年前に廃業しそのままの状態で残っていた折橋地区に残る、地区文化財の酒蔵「金波寒月」を活用して、通年で利用できる交流推進拠点施設を整備することにしました。

平成27年6月、移住・定住・交流推進支援事業に採択されました。

集落コミュニティの再構築と賑わいづくり

事業採択後直ぐに、事業主体である折橋芸（能・農）部のメンバーを中心とした「折橋地域活性化プロジェクトチーム」を発足させました。酒蔵がある折橋町の住民のほか、ワークショップ型の改修作業を行う過程で里美地区外からの一般参加者もプロジェクトチームの委員として加入した結果、委員数は最初の折橋芸（能・農）部11人から、最終的には40人を数えるまでとなりました。

折橋地域だけでなく、里美地区内の住民や酒蔵を発端として里美地区のファンとなった地域外住民の結束力が高まり、柔軟に地域内外の人を受け入れていくという、新しい「地域コミュニティ」を作ることができました。このことが、改修作業や前夜祭・オープニングセレモニー、そしてオープンした後の酒蔵を活用したイベント等全ての活動を盛況に行うことに繋がりました。


第一回ワークショップ住民説明会


改修後酒蔵入口


改修作業ワークショップ集合写真


改修作業ワークショップ

この活動の広がりは、折橋地域の住民にとって大きな自信となり、少子高齢化で寂しい雰囲気のぬぐえなかった同地域にとって再び地域の賑わいを自分たちの力で取り戻す確かな一歩となったと言えます。

集落コミュニティによる経済活動創出

酒蔵の改修作業に併せて、「カブト虫の里の散策・整備」「蔵周辺の森林でのきのこ狩り」を地域外からの参加者に体験してもらうツアーを同時開催しました。それらの体験活動を通し、参加者は酒蔵周辺の自然環境や折橋地域の魅力についても広い視点で捉えることになりました。地域外からの参加者と共にこうした総合的な体験活動から生み出される経済活動についての可能性を検証することができ、次年度に向けて女性をターゲットに季節に合わせた体験活動や2千坪ある敷地内を流れる天竜川（里川の支流）を活用した体験活動等多くの案が出され、深い議論を行うことができました。


寒月ワークショップ
10月きのこ狩りツアー

今後は地域住民の雇用の創出も

これまでの里美地区は、地域住民のみで構成されてきたコミュニティがほとんどでしたが、今回の事業はプロジェクトに関わった委員40人中25人が折橋町外のメンバーということもあり、地域外の人を含めた新しい形の「地域コミュニティ」が集う場として酒蔵が整備されたことになります。

そして、この場所に関わる地域内外の人々の発想により、様々な形で酒蔵を活用していけるような態勢を整えることができました。このことは、酒蔵オープン直後に開催した「お笑いイベント」や旅行会社主催のツアー行程の一部に酒蔵見学を受け入れる等の取り組みに表れています。

今後は、コミュニティ・ステーション酒蔵「金波寒月」を定期的に開放し、地域住民や一般の人が気軽に集まれるコミュニティ・スペースやステージイベントの開催、さらには、芸術作品の展示スペースなど、より多くの人が使いやすい交流施設を目指し、利用規約の制定などの話し合いを重ねているところです。また、同じ敷地内にある母屋の整備・利活用も視野に入れており、簡易宿泊業などの許可を取りながら宿泊を伴った体験プログラムを組むことなども考えています。このような取り組みを行うことにより、この場所の維持管理費を捻出することはもちろんのこと、地域住民の雇用の創出、そして最終目標としての人の定住化にしっかりと繋げていくことが、私たちの行動に求められていると感じています。

今回の事業の成功により、さらなるやる気と夢を膨らませた地域内外の40人による新しいコミュニティは、今後さらなる広がりを見せながら、既存の地域コミュニティをより強化する役割を担うでしょう。

地域資源を活かしたヘルスツーリズム

―温泉や食事で心身の回復・増進を図る新しい観光形態―
山形県上山市と鹿児島県指宿市の取り組み

山形県上山市、鹿児島県指宿市

近年、その地域ならではの特別な体験ができる旅行が求められており、地域の自然・歴史文化等の資源を活かした新しい形態である「ニューツーリズム」が各地で取り組まれている。

今回、我々はこの「ニューツーリズム」の中でも健康の回復・増進を図ることを目的とした「ヘルスツーリズム」に着目した。ヘルスツーリズムとは、そこにある自然や温泉、また身体に優しい食事などによる、心身の癒しで健康の回復・増進・保持するという新しい観光形態である。

ヘルスツーリズムが行政・民間企業等でどのように取り組まれているか、山形県上山市と鹿児島県指宿市の２つの自治体を訪れ調査した。

山形県上山市…上山型温泉クアオルトの取り組み

クアオルトとは、ドイツ語で「療養地・健康保養地」という意味を示す。ドイツでは、温泉（泥）・海・気候・クナイプ式という４つの自然の療養要因で病気を治癒・緩和・予防するものとされ、単に病気を治すというだけではなく、「心の保養」も含めた療養地であることが特徴である。

※クナイプ式…水療法・運動療法・食餌療法・植物療法・秩序療法の５本の柱からなり、自然の力を利用して、自らの治癒力を高める治療法

日本型のクアオルトは、日本の風土、湯治などの伝統文化に適合し、様々な地域資源を活かしながら医科学的な裏付けを持つ健康づくりプログラムを提供し、質の高い滞在型健康保養地を目指すものである。

山形県上山市は、開湯５５８年を誇るかみのやま温泉があり、平成25年に「上山型温泉クアオルト構想」を策定し、町をあげた滞在型健康保養地づくりを推進している。

上山型温泉クアオルト構想は「心と体がうるおうまち」を基本理念とし、健康、観光、環境を柱に据え、地域資源を最大限に活かした市民の健康増進と交流人口の拡大による地域活性化を図っている。

上山市には日本で初めてミュンヘン大学（ドイツ）から気候性地形療法の一定条件を満たし、認定を受けたウォーキングコースが市内５カ所・８コースあり、いつでも誰でも自由にウォーキングをすることができる。クアオルト健康ウォーキングの特徴として、ドイツで治療として用いられる気候性地形療法が挙げられる。これは自然のコースを歩き、少し肌寒い服装をして体表面温度を下げ、汗を発散させながらウォーキングを行うものである。また道中の水道で腕を冷やす等、体表面温度を下げることにより、通常の運動よりも心拍数が上がりすぎることを防ぎ、心臓への負荷を減らすというウォーキング法である。

実際に体験してみると、参加者同士楽しく会話しながら山道を歩き、道中の草木に触れることによって、心理的な安らぎも得ているように感じた。この心理的な安らぎも気候性地形療法の特徴である。

また、上山市がクアオルト事業を始めたことをきっかけにウォーキングを始め、参加することで仲間ができ、様々な地域のイベントに参加するようになったという方もいた。ウォーキングは単に健康促進事業としてだけではなく、地域住民のコミュニティが育まれるきっかけにもなっていることがわかった。

一方、健康食によくみられる質素だとか美味しくないといったマイナスイメージを払拭すべく、味や栄養面だけでなく彩りを重視し、目で見て心理的にも安らぐ健康食として、クアオルト弁当（市内４カ所）・クアオルト膳（市内７カ所）が開発されている。食材の選定にあたっては、



クアオルト健康ウォーキングの様子



「さくら亭」のクアオルト膳

ており、平成25年には鹿児島県による「指宿ヘルスツーリズム検討会」でヘルスツーリズム推進の可能性検討や、「指宿市観光戦略ビジョン」を策定。美に着目した『砂むしだけじゃない！「美来型湯治場」いぶすき』をテーマに地域資源を活かした新たな指宿市の魅力づくりを推進している。今回は、指宿市内で健康、商業等で魅力づくりに取り組む「指宿ロイヤルホテル」、「砂むし会館『砂楽』」等の視察を行った。

指宿ロイヤルホテルは、約10年前から温泉を活用した健康づくり「IT湯治」のシステム構築に力を入れており、平成26年から女性向けの本格的なヘルスツーリズム事業として、「タラソビューティ」というビューティープログラムに取り組んでいる。これは、指宿市内での観光や食事、体験活動（砂むし温泉、ポールウォーキング、ヨガなど）を実施した前後のストレス数値を比較することで、指宿市内での活動が健康や癒しにつながっていることを数値で実証するものである。指宿ロイヤルホテルは、労働安全衛生法の改正による企業内でのストレスチェック義務化を踏まえ、今後は企業向けのタラソビューティプログラムの開発と受け入れも展開する予定である。

砂むし会館「砂楽」は、約300年前から行われている砂むし湯治について、実は医学的根拠が確立されていなかったことから、鹿児島大学医学部と連携調査を進め、砂むしに入ると血中の乳酸等の値が下がることや、血液循環を促進することなど、さまざまな効能を数値的に証明した。これにより新たな付加価値の創出と他の温泉観光地との差別化を図っていく。また、温泉の持つ保健的機能を引き出す知識、技術の習得により健康づくりを適切にアドバイスできるよう職員育成にも注力している。

単に地産地消の促進だけでなく、旬のものを旬のうちに消費する「旬産旬消」の促進が強く意識されている。

鹿児島県指宿市…「健幸のまちづくり」の取り組み

指宿市は、平成24年から市民が健やかで幸せになれるまちづくりである「健幸のまちづくり」を推進し



指宿ロイヤルホテルでの「タラソビューティ」（リラックス度測定）



砂むし会館「砂楽」での砂むし湯治

まとめ

2市の取り組み方にはそれぞれ特徴があり、上山市は行政が地域活動を促す受け皿を用意して、地域住民をリードしながら、市施策の新しい形を目指していると言え、指宿市は企業や地域住民から出てきた発想や活動を行政がつなぎ役となって、連携する体制を整えようとしている。今回の調査では、その地域の魅力を掘り起こすために必要な要素や理念、また今後に活かすことができる地域づくりの視点を学ぶことができた。

地域活性化センター　安樂良太、中野永吉、三ツ井卓也、岩崎亨

アンテナショップ情報

「日本橋 長崎館」がオープン
―首都圏における長崎県の情報発信拠点―



「日本橋 長崎館」店長
● 山本 政隆

日本橋に開設

3月7日、長崎県アンテナショップ「日本橋 長崎館」が東京都中央区日本橋にオープンしました。日本橋は江戸時代から文化・経済・商業の中心として発展してきました。そして、今もなお大規模商業施設の再開発が進むなど、更なる発展が期待できる地域です。特に、江戸時代、日本橋には「長崎屋」という薬種問屋があり、出島のオランダ商館長やシーボルトなどが江戸参府の際、定宿にしていた歴史があり、長崎県にとっては非常にゆかりの深い場所でもあります。このことから、長崎県の情報発信拠点施設を開設する地域としては、絶好の場所であると考えております。この日本橋から「首都圏と長崎県との人・物・情報の交流を活発化することで地域を元気にする」を基本コンセプトに長崎県の情報発信を強化してまいります。

4つのゾーンで構成

【観光案内ゾーン】

「旅の案内人」が、定番の観光スポットからまだ知られていない隠れた観光スポットまで丁寧に案内します。また、県内各エリアの観光案内パンフレットも多数揃えておりますので長崎の最新情報をここでチェックしていただけます。

【物販ゾーン】

長崎県は島が多い県です。中央に配置した「船型什器」の周りに島に見立てた什器を据え商品を陳列しており、お客様に船に乗って島々を回遊していただくイメージで買い物をしていただけます。カステラやちゃんぽんなどの定番商品から、まだ知られていない優れた商品や隠れた逸品など、首都圏では「日本橋 長崎館」でしかお求めいただけない商品を取り揃えています。

最大の特徴は、「食と暮らしの案内人」が、商品開発に至った歴史的背景を含め商品のこだわりなどを丁寧に紹介することです。

【イベントゾーン】

長崎県内の市町や生産団体、企業による観光・物産PRや実演販売などを行い、長崎県の魅力の数々をお客様に紹介します。また、軽飲食ゾーンと連動した企画も予定しており、変化と賑わいのあるショップを創出していきます。

【軽飲食ゾーン】

長崎県自慢のお菓子やお茶、お酒などを提供しております。麦焼酎発祥の地である壱岐の「壱岐焼酎」など長崎自慢のお酒の飲み比べもできます。また、食器は、国の伝統的工芸品に指定されている「波佐見焼（はさみやき）」や「三川内焼（みかわちやき）」などを使用し、お客様にご提供しております。

「日本橋 長崎館」へは、東京メトロ日本橋駅から徒歩1分、三越前駅から徒歩3分とアクセスも抜群ですので、皆様のご来館を心よりお待ちしております。



店長自ら「食と暮らしの案内人」として店内を案内している様子



「日本橋　長崎館」外観

センター通信

平成 28 年度地方成功人材のマッチングによる土日集中セミナーのお知らせ

第２回「RESAS・ビッグデータを使いこなそう！！DMO 時代の観光マーケティング実践力強化講座」

このセミナーでは、多くの業界で注目されている「体験」価値の創出と、ＲＥＳＡＳ（リーサス）等のいわゆるビッグデータの活用を、一体的に駆使する実践力を養います。変化する社会環境や大量の情報に振り回されないためには？取得したデータをどのように「観光振興」に活かすべきか？多くの業界のマーケティング業務に携わってきた講師と一緒に考え、現場に活きるプロのノウハウを学びましょう。

【日　　程】平成 28 年６月 11 日（土）13:00 ～ 18:00 / 12 日（日）9:00 ～ 13:00（予定）
【会　　場】地域活性化センター大会議室（東京都中央区日本橋 2-3-4 日本橋プラザビル 13 階）
【講　　師】加形拓也氏（株式会社電通）、岡田健一氏（株式会社電通）
【定　　員】30 名
【対 象 者】地域活性化に取り組んでいる方、勉強したい方、興味がある方（行政職員、地域おこし協力隊、企業職員、学生など）
【参 加 費】賛助会費をお支払いください。
１回分：一般（C 会員）：25,000 円、大学生（S 会員）：10,000 円
３回分（B 会員）：60,000 円、６回分（A 会員）：90,000 円（複数人での使用も可能です）
※開催地までの往復交通費、宿泊費、交流会費、飲食代などは別途参加者負担となります。
【申込方法】FAX(03-5202-0755)、E-mail（creative@jcrd.jp）
または、ホームページの申込フォーム
【問合せ先】クリエイティブ事業室 (TEL：03-5202-6134)
※ 詳しくはホームページをご覧ください。 http://www.jcrd.jp/

※第１回「志を共有する、新しい多様な資金獲得～具体的な手法から目的実現までの道すじをまなぶ～（5/14 ～ 5/15）」も参加申込み受付中です。「ふるさと納税」や「クラウドファンディング」「ファンドレイジング」などについて、基礎から実践的な手段まで多様な講師陣から学んでいきます。是非ご参加ください。

地方創生実践塾のお知らせ

◆第１回　「住民の手で映画を作った三島市 ～地域の未来をつくるまちづくり人材の発掘と育成～」【静岡県三島市】

映画『惑う～ After the Rain ～』。この映画は、静岡県三島市の「みしまびとプロジェクト」によって制作されました。このプロジェクトは、市民が出演者という形のみならず、裏方や場所の提供、寄付などの様々な方法で映画作りに携わることにより、まちづくりに参画する市民の輪を広げるプロジェクトです。今回の実践塾では、主任講師の「ものがたり法人 FireWorks」と一緒に、１日映画作りやロケハン等を行います。映画づくりでまちづくり人材の発掘と育成に成功した実践例から“ふるさとの未来をつくるひとをつくる”まちづくりについて学びます！

【講　　師】林 弘樹氏（ものがたり法人 FireWorks 代表取締役、映画監督）
栗山 宗大氏（ものがたり法人 FireWorks 取締役、脚本家）　ほか
【開催日程】平成 28 年６月３日（金）13:00 ～５日（日）12:00
【会　　場】梅御殿（静岡県三島市一番町 19-3）※三島市立公園楽寿園内
【定　　員】40 名（先着順、定員に達し次第締め切ります）
【申込方法】FAX（03-5202-0755）、E-mail（chiiki@jcrd.jp）
または、ホームページの申込フォーム
【問合せ先】地域支援総務課（TEL：03-5202-6136）
※詳しくはホームページをご覧ください。http://www.jcrd.jp/


ものがたり法人　FireWorks
代表取締役　林　弘樹　氏


ものがたり法人　FireWorks
取締役　栗山　宗大　氏

地方創生実践塾
in 静岡県三島市

QR コード

平成 27 年度ふるさとづくり大賞・第 20 回ふるさとイベント大賞
内閣総理大臣賞表彰式の開催

平成 28 年 3 月 8 日（火）に首相官邸にて、「平成 27 年度ふるさとづくり大賞」及び「第 20 回ふるさとイベント大賞」の内閣総理大臣賞 表彰式が開催され、安倍晋三内閣総理大臣から受賞者の小原 ECO プロジェクト（ふるさとづくり大賞・福井県勝山市）、桜流鏑馬実行委員会（ふるさとイベント大賞・青森県十和田市）に表彰状と記念楯が授与されました。



平成 27 年度ふるさとづくり大賞
小原 ECO プロジェクト（福井県勝山市）



第 20 回ふるさとイベント大賞
桜流鏑馬実行委員会（青森県十和田市）



小原 ECO プロジェクトへの表彰状授与

第 20 回ふるさとイベント大賞　受賞者挨拶

〈桜流鏑馬実行委員会 プロ級選手・流鏑馬インストラクター 上村鮎子 氏〉

女性のみの参加というルールをはじめ、全国でも類をみないイベントの挑戦に対し、この賞を頂いたことは私たちにとって大きな自信になり、また、多くの協力によりここまでくることができたと、感極まっております。

この賞に恥じぬように、1000 年もの間受け継がれた流鏑馬の所作・作法と向き合い、新たな馬文化、女性が支える馬文化を「桜流鏑馬」の振興に努めながら、今後も発展していこうと思います。

平成 27 年度ふるさとづくり大賞　受賞者挨拶

〈小原 ECO プロジェクト 代表 國吉一實 氏〉

私たちの活動への最高の賞をいただき、誠に光栄です。ありがとうございます。

「私たち地域の存続意義とは何か？」を問いかけつつ、これからも直面する限界集落、地域管理といった諸課題に正面から向き合い、小原集落の５０年先、１００年先の未来へつなげる活動を展開していく所存です。

これからもご指導ご支援を賜りたく存じます。



桜流鏑馬実行委員会への表彰状授与

ふるさとキラリ賞

第20回 ふるさとイベント大賞

いす-1GP（わんぐらんぷり）『キララ2時間ISU（いす）耐久レース』

「イスが壊れるか、おのれが壊れるか」。そんなユニークで過酷なレースが京都府京田辺市の「キララ商店街」で毎年行われています。2時間の間にキャスター付き事務椅子に乗り、1周約180メートルの商店街の特設コースを何周できたかを競う耐久レース「いす－1GP」。

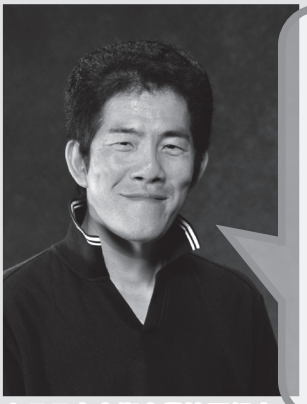
全国初のイベントを開催することで、子どもたちが生まれ育ったまちや商店街を自慢し、誇りに思えるようにという地域の店主たちの熱い思いから誕生しました。

イスに座ったまま地面を蹴って進むという一見簡単そうなレースですが、途中、タイヤがとれたり、背もたれも壊れ、最後には足の根元から折れてしまうほどの過酷さで、1チーム3人が交代しながら、限界に挑みます。

郊外型店舗の増加により、商店街の衰退が全国的な課題となる中で、賑わいを取り戻す商店街の活性化の起爆剤として、京田辺市発祥の「いす－1GP」は先駆的な取り組みとして全国各地の商店街へ、また世界へも広がる一大イベントです。



主催者メッセージ



毎年全国各地から脚力自慢の強者や、地元や会社の期待を背負ったチームや色とりどりの仮装を施したチームなど、楽しみながら熱い思いをもって、商店街を舞台に激しくも華やかなレースを繰り広げます。

参加したい方も、応援の方も、ぜひ一度、全国各地そして世界にも広がる「いす-1GP」の聖地、京都府京田辺市のキララ商店街までお越し下さい。

キララ商店街事業協同組合
理事長
田原 剛さん



評価のポイント

- シャッターが目立つ商店街の活性化を図るため、全国初のイベントを開催しようと店主らが事務椅子レースを発案し、そのユニークさから全国各地の商店街でも開催されるようになっている。
- テレビや新聞など「いす－1GP」発祥の地としてのPR効果、市外から訪れる選手・観客による経済効果も大きく、賑わいを取り戻す大きな刺激策となっている。
- 商店街の若手店主や従業員のほか、市内に立地する大学の学生等も参加し、自ら考え自主的に行動をおこす組織を結成し運営に当たっている。

次回開催日程

■開　催　日：平成29年3月25日(土)
■開 催 場 所：キララ商店街（近鉄新田辺駅東地域）一帯
■問い合わせ先：・団体名　キララ商店街事業協同組合
・住　所　〒610-1361　京都府京田辺市河原食田10-70
・電話番号　0774-63-5267
・ＵＲＬ　http://www.kiraramall.jp

平成27年開催DATA

自治体名	京都府京田辺市
自治体人口	67,377人　※H27.12末現在の住民基本台帳人口
主催団体	キララ商店街事業協同組合
開催回数	6回
開催日	平成27年3月28日(土)
開催場所	キララ商店街（近鉄新田辺駅東地域）一帯
観客数	約4,000人

ふるさとキラリ賞

第20回
ふるさとイベント大賞

日本初のホタル舟（ぶね）

「日本初のホタル舟」はその名のとおり、日本で初めて船上からホタルを観賞する試みとして地元有志を中心に運行を開始しました。平成3年の就航から平成27年で25回目を数え、歴史あるイベントへと成長してきました。

当地域は、全国的にも有数のホタル観賞地であり、5月下旬から7月上旬にかけて場所を変えながら全地域で観賞することができます。シーズン中には、平日の夜間にもかかわらず、県内外から「ホタル案内所」に観賞客が訪れ観賞地へご案内をしています。豊田の風物詩「ゲンジボタル」を観賞された後は、遠い昔を回想しているようなお客様の表情が印象的です。

闇夜の中、川の流れに身をまかせると、淡く輝くホタルの光が数万の輝きとなり、水面に漂う光と相まって舟を覆いつくします。しばし日常を忘れ、神秘の世界をご堪能ください。



主催者メッセージ



儚い命はまるで桜のよう･･･。
人々の心を癒す自然界の宝物。
数万匹のホタルのトンネルを抜けると、そこに待っているものとは・・・？
満足度１００％を誇る幻想的な世界へ！
皆様も忘れかけていた“大切なもの”を取り戻しにいらっしゃいませんか！？

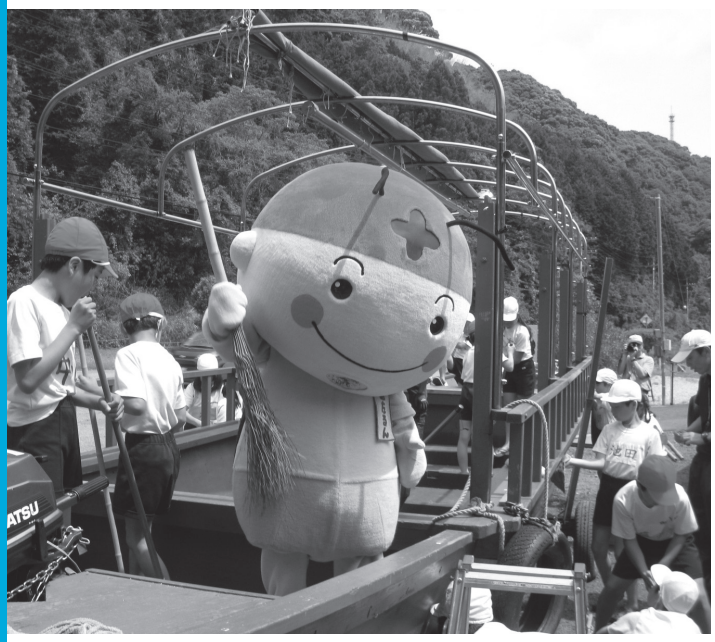
ホタル舟実行委員会
広報担当
伊藤 孝之さん

評価のポイント

- 船上からホタルを鑑賞する独創的な催しとして平成３年から実施されている。小学生の体験学習の受け入れなども行い、ホタルについての学習だけでなく、ホタル舟の清掃なども行い、ホタルを大切にする下関市民の想いについて学んでいる。
- 地域の認知度アップに貢献しているほか、道の駅「蛍街道西ノ市」や「豊田ホタルの里ミュージアム」などとの相乗効果もあり、交流人口の増加に伴う経済、観光など多様な面から波及効果がある。
- 商工会青年部を中心とした地域ボランティアで運営されており、高齢者から若手までの幅広い年代層のスタッフが来訪者をもてなしている。

次回開催日程

■開　催　日：平成28年6月7日(火) ～22日(水)
■開 催 場 所：木屋川(こやがわ)
■問い合わせ先：・団体名　ホタル舟実行委員会(豊田町観光協会)
・住　所　〒750-0441　山口県下関市豊田町中村876-4
・電話番号　083-766-0031
・ＵＲＬ　http://www.city.shimonoseki.yamaguchi.jp/kanko/



平成27年開催DATA

自治体名	山口県下関市
自治体人口	272,360人　※H27.12末現在の住民基本台帳人口
主催団体	ホタル舟実行委員会
開催回数	25回
開催日	平成27年6月9日(火)- 24日(水)
開催場所	木屋川(こやがわ)　※木屋川は国指定天然記念物「木屋川ゲンジボタルの発生地」
観客数	2,867人

優秀賞

第20回
ふるさとイベント大賞

にいがた総おどり

14種類の踊りのジャンル・総勢240のダンスユニットが、新潟県全市町村、そして全国16エリアから集結。夏を締めくくる３日間、新潟の街は踊り一色に染まります。

【keyword：300年】

「新潟下駄総踊り」は、江戸時代に四日四晩踊り明かしたと言われる、踊りの街新潟のアイデンティティ。古町通を踊り歩くエキサイティングな光景は、まるで時代絵巻物。

【keyword：フード】

万代シテイ会場には、多彩な飲食店ブースが出店します。屋台はもちろん、美味しい地元新潟の店舗との連携で美味しい食を提供します。

【keyword：飛び入り参加】

ダンスユニットやチームにも、心踊り出せば、飛び入りだってOK！最終日はオーディエンスも一緒に会場を盛り上げます。

【keyword：スペシャルプログラム】

開催期間３日間のなかに盛り込まれたスペシャルプログラムが、興奮の祭を作ります。毎年変化するプログラム。その目で何が起こるか目撃してください。

主催者メッセージ



新潟総踊り祭実行委員会
総合プロデューサー
能登　剛史さん

フラ、ジャズ、民謡、よさこい…オールジャンルの踊りが集うお祭りです。全国から集まった1万5千人が踊り、21万人もの観客が熱狂します。江戸時代の盆踊りを復活させた「新潟下駄総踊り」や、健康寿命を延ばすための「総踊り体操」なども制作し、老若男女・国内外のあらゆる人と感動を共有する3日間になります。

評価のポイント

- 「踊り」という表現手段を通じて、子ども達に幸せな未来を生み出すことを目的に開催され、「次の世代へ受け継ぐ心」をテーマとし、市民の手作りで開催する踊りの祭典となっている。
- 日本最大級のオールジャンルのダンスフェスティバルとして、祭りへの参加団体は２５０団体、観客動員数は21万人となっており、参加地域は新潟県内をはじめ全国16都道府県にわたるほか海外からの参加もあり、文化交流エリアも年々拡大している。
- 実行委員会が運営主体とし、プロモーション活動は同委員会の踊りスタッフが自ら実施し、県内各地のお祭りやイベントにおいて演舞披露をしながら祭りを盛り上げている。

次回開催日程

■開　催　日：平成28年9月17日(土)～19日(月祝)
■開 催 場 所：万代シテイ、古町通、新潟駅南口広場
　　他　中心市街地9会場以上
■問い合わせ先：・団体名　新潟総踊り祭実行委員会
　　・住　所　〒950-0088新潟県新潟市中央区
　　万代1丁目6番1号　バスセンタービル4Ｆ
　　・電話番号 025-383-6630
　　・ＵＲＬ　http://www.soh-odori.net/





平成27年開催DATA

自治体名	新潟県新潟市
自治体人口	802,813人　※H27.12末現在の住民基本台帳人口
主催団体	新潟総踊り祭実行委員会
開催回数	14回
開催日	平成27年9月19日(土)~21日（月祝）※毎年9月中旬
開催場所	万代シテイ、古町通、新潟駅南口広場　他　中心市街地9会場以上
観客数	186,360人

優秀賞

第20回
ふるさとイベント大賞

菓子祭前日祭（かしまつりぜんじつさい）

兵庫県豊岡市にはお菓子の神様「菓祖 田道間守命(たじまもりのみこと)」を祀る全国の神社の総本社「中嶋神社」が鎮座し、多くの菓子業者の崇敬を集めていて、「お菓子のルーツ」の地であります。この当地にしかない財産・観光資源・特色を全国の菓子業者や消費者の皆様に広く認識していただくと共に、豊岡の知名度アップと地域経済や中心市街地などの活性化を図ることを目的として、お菓子をテーマとしたイベント「菓子祭前日祭」を平成23年より実施しています。

「菓子祭前日祭」はその名の通り、毎年４月第３日曜日に開催される、「中嶋神社 菓子祭」の前日に開催されます。県内外から多数の菓子店が軒を連ねて自慢の菓子を販売する他、中嶋神社から神職をお招きしての神事や、お菓子に関する様々な行事を実施しています。イベント当日は会場の駅前の目抜き通り（豊岡駅通商店街周辺）が、甘い香りにつつまれたスイーツロードへと様変わりし、訪れる人は自然と笑みがこぼれます。



主催者メッセージ



菓子祭前日祭実行委員会
実行委員長
木谷 敏勝さん

歩行者天国となった豊岡駅前目抜き通りに県内外の菓子店が50店舗以上ズラリと並び、それぞれ趣向を凝らした方法で自慢の菓子を販売している雰囲気は、会場内を歩くだけでもワクワクします。祭りにあわせて新作・限定菓子が販売されるのも呼び物で、人気のお店はたちまち売り切れてしまいます。出店者オリジナルの菓子のコンテストや菓子に関する様々な行事も繰り広げられ、当日は会場周辺が甘い香りでつつまれ、メルヘンの国に迷い込んだようです。


中嶋神社　菓子祭 例大祭

評価のポイント

- お菓子の神様のふるさととして、お祭りの儀式以外にもその魅力を拡大させ、イベントとして盛り上がるよう工夫・企画を行っており、地元菓子産業のレベルアップも期待される。
- 出店者アンケートでは約８割の商品が売り切れ、来場者アンケートでも約７割が1,000円から3,000円の買い物をしており、商店街・飲食店へも売上増の好影響が表れている。
- 様々な団体で実行委員会を組織されており、それぞれの特色を活かした活動が発揮されることにより、イベント内容の充実が図られているとともに継続性も担保されている。

次回開催日程

■開　催　日：平成29年4月15日(土)予定
■開 催 場 所：豊岡市中心市街地（大開通り:豊岡市千代田町、中央町）
■問い合わせ先：・団体名　菓子祭前日祭実行委員会事務局（豊岡商工会議所）
・住　所　〒668-0041　兵庫県豊岡市大磯町1-79
・電話番号　0796-22-4456
・ＵＲＬ　https://www.facebook.com/sweetsfestival

平成27年開催DATA

自治体名	兵庫県豊岡市
自治体人口	84,828人　※H27.12末現在の住民基本台帳人口
主催団体	菓子祭前日祭実行委員会
開催回数	５回
開催日	平成27年４月18日(土)　※４月第３日曜日の前日
開催場所	豊岡市中心市街地（大開通り:豊岡市千代田町、中央町）
観客数	約35,000人

優秀賞

第20回
ふるさとイベント大賞

燈籠祭（とうろうまつり）

東紀州の夏の夜を彩る、巨大燈籠と花火の競演「燈籠祭」。

毎年7月下旬の土曜日に三重県紀北町の長島港で開催し、県内外からたくさんの来場者で賑わい、この地方の夏の風物詩として定着しています。

大勢の地元の人々が協働し、数ヶ月にわたる作業期間を経て制作する巨大燈籠は毎年テーマに沿ったものをモチーフとしていて、平成27年は、古くからの地元の基幹産業である「カツオ一本釣り」の様子を再現した高さ6mを超す巨大な燈籠を制作し、海に浮かべました。

また、もう一つの呼びものである花火は、燈籠祭オリジナルの「燈籠祭大仕掛け 彩雲孔雀（さいうんくじゃく）」と名付けられ、会場の地形を利用した見応えのあるもので、多くの方々を魅了しています。そのほか様々な趣向を凝らした3,000発の豪快な花火が、海に浮かぶ巨大燈籠のバックとして競演し、夏の最高の思い出を提供しています。



主催者メッセージ



毎年制作された巨大燈籠は完成したものも素晴らしいが、５月～７月の３ヵ月間、実行委員会スタッフを始め、地域住民の皆様の協力で行う作業工程も「燈籠祭」であると考えています。作業を見学にきて釘一本打ったり、一針縫ってみて実際に燈籠祭を作り上げる過程を是非味わっていただきたいです。

紀北町燈籠祭実行委員会
2015実行委員長
東 城さん

評価のポイント

- 毎年メインテーマを設定し、それに合わせて巨大燈籠の製作や子どもたちによるミニ燈籠の製作、「中型燈籠コンクール」の実施により多くの人々に燈籠祭に関わってもらうよう工夫を凝らしている。
- 巨大燈籠と花火の競演はこの地方ならず県内外から多くの観光客が訪れ夏の風物詩としてすっかり定着し、町内の宿泊施設はかなり早い段階から予約で満室になるなど、祭りの当日は町の人口以上の観客が訪問し、その経済効果は大きい。
- 巨大燈籠の制作期間中は、スタッフだけでなく多くの町民も加わり皆で燈籠祭をつくりあげているほか、祭りの１～２週間前から自宅の軒先に提灯をぶら下げ、祭りの雰囲気を盛り上げている。

次回開催日程

■開　催　日：平成28年７月23日（土）
■開 催 場 所：長島港
■問い合わせ先：・団体名　紀北町燈籠祭実行委員会
・住　所　〒519-3204　三重県北牟婁郡紀北町東長島287番地15
・電話番号　0597-47-5378
・ＵＲＬ　http://www.touroumaturi.com/



平成27年開催DATA

自治体名	三重県紀北町
自治体人口	16,978人　※H27.12末現在の住民基本台帳人口
主催団体	紀北町燈籠祭実行委員会
開催回数	29回
開催日	平成27年７月25日(土)
開催場所	長島港
観客数	52,000人







評価のポイント

●戦国武将　蒲生氏郷（がもう うじさと）公が作り上げた経済・文化振興施策である会津固有の制度「十楽」を現在の状況に合わせて復活し、まちづくり、ものづくり、歴史的背景を新たな観光資源とするよう企画されている。
●地場産品の販売を基本としながら、このイベントをきっかけとした新たな商品開発や回遊型の広域観光への誘導を展開するなど、工夫により広域的な経済効果があがっている。
●地元産官民の19団体が核となり連携した運営を行っている。また、有志ボランティアとして高校生から80歳の高齢者まで、幅広く住民が関わっている。

次回開催日程

■開　　催　　日：平成28年4月16日(土)-5月5日(木)迄の土日祝日、8月13日(土)-16日(火)、9月23日(金)-25日(日)、平成29年2月10日(金)-11日(土)　■開　催　場　所：会津若松城内・東山温泉
■問い合わせ先：
・団体名　サムライシティプロジェクト実行委員会　・住　所　〒965-0032　福島県会津若松市旭町4-25（NPO法人会津NPOセンター内）　・電話番号　0242-39-6539　・URL　http://aizu-jyuraku.jp

最優秀賞

第20回
ふるさとイベント大賞

総務大臣表彰

會津十楽（あいづじゅうらく）

戦国時代、会津の領主であり、キリシタン大名であった蒲生氏郷（がもう　うじさと）公（※キリシタン名／レオ氏郷）は、転地の際「われらはこの地に再び十楽の地を築かねばならぬ。土地を豊かにし、商いを盛んにし、領民を幸せにすることこそ、我らの務めなのだ」と庶民による自由市「十楽」を開き、産業振興、インフラの整備等、現在の会津の礎を築きました。

震災原発事故という逆境におかれた中にあって、復興へ向けての象徴として、自由市「會津十楽」を地元商工業者と市民ボランティアを中心に企画、開催いたしました。南蛮文化の香り高い、華やかだった当時の食、工芸、芸能等を提供し、あわせて伝統に培われた会津の今を発信しています。

当時の市の空気感をつくるため、テントではなく時代小屋を50基制作し、スタッフ、売り子も時代衣装に身を包み、食や物産はすべて戦国時代にあったものにこだわり、提供しています。食では、400年前の戦国武将のレシピを再現したり、今に伝わる伝統食の基になったレシピを再現し、提供しています。また体験小屋では、せんべい焼き体験や伝統工芸の制作体験、また甲冑や時代衣装の着付け体験をすることができます。昔話し小屋では、語り部が会津に伝わる民話を語り、お伽衆として地元の劇団員が蒲生氏郷物語を上演。また日本伝統の着物で来場した方に特典をつけたり、會津十楽でのみ使用できる「十楽銭」を発行。それはまるで400年前にタイムスリップしたかのような郷愁を誘い、復興への新たな活力を醸成する、市民と観光客の交流の場となっています。極力、現代風を排除して「体験」を重視したイベント運営を行う分、手間隙は並大抵ではありませんが、観光客にリピーターができるなど、回を重ねるたびに盛り上がりを見せています。

主催者メッセージ

まるで戦国時代の会津にタイムスリップしたかのような感動と郷愁を味わえます。400年前の市の再現、會津十楽の門をくぐった瞬間から、あなたはタイムトラベラー。会津の全銘柄の酒を愉しむも良し。親子でせんべいを焼くも良し。会津の民と盆踊りに興じるも良し。食、匠（工芸）、興（遊び、芸能）はすべて五感で楽しめるものばかりです。



サムライシティプロジェクト実行委員会
監事
志藤　弘彰さん





平成27年開催DATA

自治体名	福島県会津若松市
自治体人口	122,749人 ※H27.12末現在の住民基本台帳人口
主催団体	サムライシティプロジェクト実行委員会
開催回数	10回
開催日	平成27年2月13日(金)−14日(土)、4月1日(水)-6月28日(日)の土日祝日、8月13日(木)−16日(日)、9月20日(日)-23日(水)
開催場所	会津若松城内・東山温泉・神明通り
観客数	257,000人







評価のポイント

●日本古来の伝統武芸である流鏑馬を競技化し、神事として開催するものは男性しか参加できないものが多い中、女性だけが出場するものは全国でも類がない貴重な企画である。
●国内外からの関心も強く、全国各地から参加者が集まるほか、外国人観光客等の誘致につながっている。
●十和田市内の乗馬倶楽部等関係団体や高校、大学が連携し運営している中で、イベントの開催に限らず、選手、指導者等後継者の育成にも努めている。
●古くから馬の名産地として飛躍を遂げた十和田市の和種系の馬を活用した街づくりの起爆剤となるイベントである。

次回開催日程

■開　催　日：平成29年4月22日(土)～23日(日)　■開 催 場 所：中央公園緑地
■問い合わせ先：
・団体名　桜流鏑馬実行委員会
・住　所　〒034-0001 青森県十和田市大字三本木字佐井幅115-2（十和田乗馬倶楽部内）
・電話番号　0176-26-2945　・URL　http://www.towada-joba.com/

大賞

第20回
ふるさとイベント大賞

内閣総理大臣賞

桜流鏑馬（さくらやぶさめ）

青森県の南に位置する十和田市は、国の特別名勝及び天然記念物に指定された「十和田湖」「奥入瀬渓流」を始めとする大自然を有し、日本を代表する観光地として知られています。

一方、十和田市現代美術館を始めとするアートな街づくりを展開している市街地地区は、明治期に軍馬補充部三本木支部が設置され、国内最大規模の軍馬補充部支部として栄えた歴史があります。

現在、市街地地区の中心部にある「官庁街通り」は、「日本の道100選」にも選ばれた通りであり、軍馬補充部支部の石碑や馬のオブジェが設置されるなどの整備がされており、「駒街道」という愛称で親しまれています。また、「十和田市馬事公苑 駒っこランド」では、馬と触れ合えるほか、全国的にも珍しい馬の歴史や文化の資料が展示されている称徳館も開設されています。このように、十和田市は今もなお、馬の歴史が色濃く残る「駒の里」として近隣市町村から認知されています。

毎年4月20日から5月5日には「十和田市春まつり」が開催され、官庁街通りや大会会場となる中央公園緑地一帯は鮮やかな桜並木が咲き誇ります。中央公園緑地は観桜会場としても解放されており、市民を始め多くの観光客で賑わっています。

桜流鏑馬はこの「桜」と「駒の里」であることを、市民を始め、県内外に広くＰＲするため行われた春季イベントです。

もともと「流鏑馬」は、神事として日本全国で広く行われていますが、そのほとんどは男性騎士が参加しています。しかし、桜流鏑馬は日本で唯一「女性のみが参加できる」という一風変わったイベントであり、毎年、全国各地から集まった女流騎士が初級・中級・上級に分かれ、日頃の鍛錬の成果を競い合います。

女流騎士達が華やかな衣装で馬に跨り、桜並木を疾走して的を射る様は「勇壮」にして「華麗」。この美しい時代絵巻を見るべく、毎年多くの観客が訪れており、「十和田市春まつり」の賑わいの一翼を担うまでに成長しました。大会中は実況も行われ、初めて流鏑馬をご覧になられる方にも分かりやすく解説しています。この他にも、会場内では地場産品を用いた露店や「馬とのふれあいコーナー」の設置、「やぶさめビンゴゲーム」などを実施し、幅広い年齢の方に楽しんでいただくことができます。

是非、歴史と文化そして観光資源が融合した、十和田市でしか見ることができない「桜流鏑馬」をご覧ください。

主催者メッセージ



桜並木の中を日本各地、さらには海外からも集まった女流騎士が疾走して的を射る姿は必見！華麗な乙女たちが次々と疾走していく光景を観にカメラマンもたくさん訪れます。競技のほか衣装コンテストもあり、人馬ともお気に入りの和装で参加しています。

日本の馬が日本の伝統を演じるという、世界に誇れる「桜流鏑馬」を是非ご覧ください。

桜流鏑馬実行委員会
プロ級選手･流鏑馬インストラクター
上村 鮎子さん





平成27年開催DATA

自治体名	青森県十和田市
自治体人口	63,444人 ※H27.12末現在の住民基本台帳人口
主催団体	桜流鏑馬実行委員会
開催回数	12回
開催日	平成27年4月25日(土)-26日(日)
開催場所	中央公園緑地
観客数	12,000人（2日間）

首長の思い
column



人・まち・みどり みんなで創る “豊かさ”実感都市・かごしまの実現を目指して

鹿児島市長　森　博幸

鹿児島市は、雄大な桜島や波静かな錦江湾に代表される豊かな自然、個性あふれる歴史・文化など多彩な魅力を有し、60万市民の生活を支え、来街者を楽しませる多様な都市機能が集積する南九州の中核都市として、着実な発展を続けております。

私は平成16年12月に市長に就任し、現在3期目を務めております。これまで、「第五次鹿児島市総合計画」に掲げた都市像「人・まち・みどり みんなで創る〝豊かさ〟実感都市・かごしま」の実現に向け、子育て支援や観光振興などを重点項目として、市政運営に取り組んでまいりました。

平成27年度は、本市の旧集成館など3つの構成資産を含む「明治日本の産業革命遺産」が世界文化遺産に登録されるという、大変うれしい出来事がありました。また、交通安全や防災・災害対策などの取り組みが実を結び、WHOの「セーフコミュニティ国際認証」を取得したほか、「桜島・錦江湾ジオパーク」の世界認定に向け、国内推薦の手続きを進めてきたところです。3月には、第1回となる「鹿児島マラソン2016」を開催しました。県内外から約1万2千人ものランナーの参加のもと、3千人を超えるボランティアの協力やおもてなし、沿道での市民の熱い声援など、まさに地域が一体となって大会を盛り上げ、滞りなく大成功を収めることができました。是非この大会を、鹿児島に春の訪れを告げる風物詩として育ててまいりたいと考えております。

今後も、本市ならではの自然や歴史、活火山・桜島と都市が共生する特性、市民生活の基本である安心・安全のための取り組みが、それぞれ世界基準にある都市として、その価値と魅力を国内外に向けてさらに発信し、アピールしてまいります。

ところで、私は、昨年5月から九州市長会の会長を務めております。九州では、全線開業から5周年を迎えた九州新幹線や、東九州自動車道の大分市～宮崎市間の開通により形成された循環型高速道路ネットワークなど、高速交通体系の整備が進み、各都市間の往来も盛んになってきております。一方で、人口減少や超高齢化など地方都市の取り組むべき課題が山積しておりますことから、九州118市が一致団結し、情報の共有を図った上で、お互いに知恵を出し合い、それぞれが工夫を凝らしながら施策を推進するとともに、国に対して的確に意見を述べていくことが大変重要であると考えております。九州市長会が「九州はひとつ」の合言葉のもと、さらに充実した活動ができるよう取り組んでまいります。

今年度は、地方創生が本格的にスタートする極めて重要な年です。本市は、昨年12月に人口ビジョン・総合戦略を策定し、合計特殊出生率の現状や若い世代の転出超過などの課題を踏まえ、雇用の確保、結婚・出産・子育てへの支援、交流人口の拡大など人口減少に歯止めをかけるための取り組みや、移住促進、コンパクトなまちづくりなど人口減少社会に適応するための取り組み、さらには「生涯活躍のまち（CCRC）」構想の策定や、大学との連携強化、周辺3市との連携中枢都市圏の形成など、本市の特性を踏まえた取り組みを掲げております。実効性の高いこれらの施策を着実に進め、市民が郷土への誇りを胸に生き生きと暮らし、国内外の多くの人々が行き交う、真に〝豊かさ〟を実感できるまちを目指して、持てる力を最大限に注いでまいります。

手前みそですが…

福井県

越前市 207

歴史と産業と自然が根付くまち 越前市



■たけふ菊人形　北陸の秋の風物詩となっている菊人形展。今年は 10 月 6 日（木）から 11 月 6 日（日）まで開催。

越前市は福井県のほぼ中央に位置しています。その歴史は古く、大化の改新後に越前国の国府がおかれるなど、約 1000 年にわたり越前国の中心地として栄えました。そのため、市街地には多くの寺社が残り、古い町並みや建物を活かしたまちづくりが進められています。

古くからものづくりが盛んで、「越前和紙」「越前打刃物」「越前指物」は国の伝統的工芸品に指定されています。現在は半導体などの先端産業や化学工業などが盛んで、製造品出荷額は県内 1 位と県内有数の産業都市でもあります。郊外には、万葉集や継体天皇ゆかりの東部地区、豊かな自然環境が残る西部地区があり、このまちを訪れたみなさまを楽しませます。

また、北陸の秋の風物詩となっている「たけふ菊人形」や、最近「猫寺」としてテレビに紹介されている「御誕生寺」には毎年多くのお客様が訪れます。

歴史と産業と自然が根付くまち越前市にぜひお越しください。



■御誕生寺　曹洞宗の寺。数十匹の猫が暮らしており、通称猫寺（ねこでら）として知られ、全国から猫ファンが訪れている。



■蔵の辻　街の中心部にあり、白壁の蔵が立ち並ぶ。その町並みは国の都市景観大賞「美しいまちなみ大賞」の受賞を受けている。



■越前の里　味真野苑　四季折々の美しい花を見ることができ、5 月上旬～6 月上旬はボタン園に 340 株のボタンが花を咲かせます。



■越前市サマーフェスティバル　8 月 13 日～ 15 日に開催。15 日の花火大会では約 1 万発の花火を打ち上げる。



■越前和紙　手すき和紙全国一の生産量を誇る。横山大観をはじめ、多くの芸術家たちが愛用したことでも知られる。



■花筐公園　継体天皇ゆかりの公園。春には約 1000 本の桜、秋には紅葉が楽しめる。



■ボルガライス　越前市発祥のご当地グルメ。名前の由来やルーツは謎に包まれている。

地域づくり 5 月号

2016 年 5 月 1 日発行　編集・発行＝一般財団法人地域活性化センター
東京都中央区日本橋 2-3-4 日本橋プラザビル 13 階 電話 03-5202-6131（代）http://www.jcrd.jp/　印刷・製本／株式会社太平印刷社

法律で許可された場合以外に本誌からの無断転載を禁止します
落丁・乱丁はお取り替えします。地域づくり情報課（03-5202-6138）まで、ご連絡下さい。

地域づくり5月号（通巻323号）　平成28年5月1日　一般財団法人　地域活性化センター発行

宝くじは、みなさまの豊かな暮らしに役立っています。


点字本レシピ集


冊子
「フラッグフットボール作戦ブック」


ベンチ

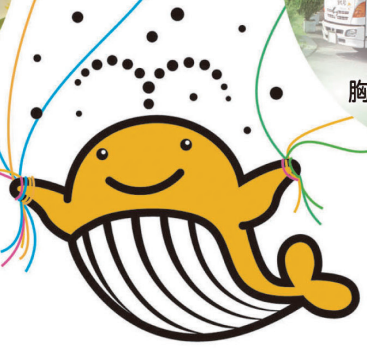

さくらの若木植栽


一輪車


パブリックアート


冊子
「おやこの食育教室
（三角巾付）」


胸部X線検診車



宝くじは、図書館や動物園、学校や公園の整備をはじめ、
少子高齢化対策や災害に強い街づくりまで、
さまざまなかたちで、みなさまの暮らしに役立っています。

一般財団法人 日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や
公益法人等が行う社会に貢献する事業への助成を行っています。

一般財団法人
日本宝くじ協会
http://jla-takarakuji.or.jp/



地域づくり

特集編（2016.5） ISSN 1340-8917

特集　楽しむスポーツイベントによる地域活性化

グラビア

2	基調論文	**地域資源を生かしたスポーツが地域を活性化**	牧村真史
6	北海道滝川市	ゆっくり走って地域住民との交流や自然を体験	木村直也
8	北海道福島町	北の大地で美しくも激しい戦い「女だけの相撲大会」	河原塚利雄
10	青森県つがる市	人間愛がテーマの国際交流・スポーツイベント	葛西兼光
12	山形県鶴岡市	千四百年の歴史に包まれた2446段の石段にチャレンジ！	安達一春
14	東京都	ゴミ拾いをスポーツ化して地域の課題を解決	馬見塚健一
16	新潟県魚沼市	豪雪を生かしてスポーツ雪合戦	渡部麻美
18	静岡県伊東市	地元高校生考案の「まくら投げ」が人気イベントに！	栗原扶美代
20	和歌山県すさみ町	スポーツフィッシングで地域振興	朝本紀夫
22	鳥取県湯梨浜町	小さな村から生まれたスポーツを全国へ	東原正治
24	愛媛県松前町	直径1㍍の桶「はんぎり」で海上を競漕	松田周二
26	高知県いの町	清流仁淀川で国際水切り大会	生野宜宏
28	沖縄県糸満市	吉凶を占う神事の大綱引	大城高彦
30	トピックス	世代や性別を超えて楽しめるスポーツ「鬼ごっこ」	平峯佑志
32	第20回ふるさとイベント大賞	大賞・内閣総理大臣賞　桜流鏑馬	

2016年5月1日発行　編集・発行＝一般財団法人地域活性化センター　©2016 jcrd.jp
東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131（代）http://www.jcrd.jp/　印刷・製本／株式会社太平印刷社

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです

楽しむスポーツイベントによる地域活性化



「女だけの相撲大会」取組風景

● 北海道福島町（p 8- 9）



マラソンとピクニックを合わせたマラニック。菜の花畑の中をゆっくりと

● 北海道滝川市（p 6- 7）



羽黒山石段マラソン　鬱蒼とした杉並木に囲まれた2446段の石段

● 山形県鶴岡市（p12-13）



水泳駅伝スタートの瞬間

● 青森県つがる市（p10-11）



国際雪合戦

● 新潟県魚沼市（p16-17）



スポーツ GOMI 拾い大会の競技中の様子

● 東京都（p14-15）



カジキ釣り大会での釣果を囲んで記念撮影

● 和歌山県すさみ町（p20-21）



全日本まくら投げ大会の様子（大将に狙いを定めて）

● 静岡県伊東市（p18-19）



はんぎり競漕の様子。しぶきが舞います

● 愛媛県松前町（p24-25）



ジュニアグラウンド・ゴルフ大会の様子、ティーショットを打つ男子選手

● 鳥取県湯梨浜町（p22-23）



糸満大綱引の様子。糸満の伝説上の人物に扮した若者が戸板に担がれ登場、綱引き開始

● 沖縄県糸満市（p28-29）



仁淀川国際水切り大会風景「真剣勝負です」

● 高知県いの町（p26-27）

特集

楽しむスポーツイベントによる地域活性化

地域資源を生かしたスポーツが地域を活性化

―日本のスポーツの現状と地方創生―

集客創造研究所所長 ● 牧村 真史

オリンピックで高まるスポーツへの関心

2020年東京オリンピック・パラリンピックの招致が決定、今年はリオデジャネイロオリンピック・パラリンピックの開催年でもあり、スポーツへの関心が高まっている。

なでしこジャパンの女子サッカーワールドカップ優勝へ導いた澤穂希選手、ラグビー・ワールドカップの南アフリカ戦での歴史的な勝利でラグビーを一躍日本中の注目スポーツとした五郎丸歩選手、男子フィギュアで世界歴代最高得点の羽生結弦選手など日本のスポーツ界は数多くのヒーローを生み出し、こうしたアスリートによる競技スポーツの人気は出身地域の認知度向上や地域活性化に様々な波及効果を生み出している。

日本の競技人口は約7200万人（総務省平成23年社会生活基本調査）で日本の総人口の約6割がスポーツを行い、日本のトッププロ選手・アスリートを頂点に幼児から高齢者まで幅広い据野を持っている。

スポーツを大別にすると①野球、大相撲、サッカー等に代表されるプロスポーツ②オリンピック、ワールドカップ、国体等の競技スポーツ③全国スポーツレクリエーション大会、ねんりんピック等の生涯スポーツ―に区分され、多様な競技やレクリエーション、健康づくりとしてのスポーツが行われている。

日本レクリエーション協会では①若者の参加機会を通し地域コミュニティーの活性化②障がい者と楽しむレクリエーション③総合地域クラブづくり④高齢者の体力づくり⑤子供の体力向上⑥指導者養成、講演会―などを通しスポーツレクリエーションの支援を行い、これらの活動や地域の健康

筆者プロフィール

牧村 真史氏
（まきむら・まさふみ）

1950年、東京都生まれ。コミュニケーションプロデューサー。イベントプロデューサー。博覧会や大型イベントのプロデュースやコミュニケーション戦略、地域活性化の戦略の企画・開発・プロデュース等を得意とする。専門誌、コミュニティ紙の編集者を経て1980年に株式会社BRAIN 80を設立。現在、（株）集客創造研究所所長。Re-Public Initiative専務局長、柏崎市特別職シティーセールス推進官、全国菓子博覧会・三重総合プロデューサー、名古屋市公園経営アドバイザー等に就任。

ジャパンEXPO三陸・海の博覧会（1992年）総合プロデューサー、愛知万博（2005年）チーフプロデューサー、上海万博（2010年）日本政府館プロデューサー、上海万博協会運営海外顧問（2010年）、東京都築地市場「TOKYO ICHIBA PROJECT」広報プロデューサー等を歴任。

づくり、コミュニティーの活性化などからニュースポーツや遊び、環境づくりのスポーツ化など新たな取り組みが行われている。

昨年、新設されたスポーツ庁は生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営むことが出来る社会の実現を掲げ、スポーツＭＩＣＥ、障がい者スポーツ、少子高齢化時代に対応する健康長寿のスポーツ普及などを推進している。

また、東京への一極集中による地方の人口流出が、地域経済・産業・人材の空洞化、過疎化に拍車を掛け、地方の衰退をもたらしているとして、日本経済や地域の活力の向上を目的に地方創生が発表された。

土地ごとの祭りや遊びをスポーツ化して地域活性化の起爆剤に

地方創生では、国際戦略総合特区・地域活性化総合特区をはじめ各地域の特性に適応する様々な規制緩和を図る特区が設けられた。地域再生制度は中心市街地活性化をはじめあらゆる領域、ジャンルにまたがり、地域活性化の手法はハード（施設）からソフトへ、ソフトからコンテンツへと変化し、従来の手法を脱却し、多様な視点、複合的効果の観点から考える必要がある。

地方の小都市では国際規格を持つ施設を必要とする競技スポーツ、高額な施設投資や運営費を必要とするプロスポーツではなく、地域の資源や特性を生かし、大規模な施設投資を必要としない幅広い生涯スポーツを地域活性の起爆剤とすることが必要と考える。

例えば、南国土佐・高知を発祥とする「よさこい祭り」は全国に広がり多様な形態を持ち、市民、企業、団体が参加し地域のコミュニケーションを活性化するばかりでなく、観光産業を生み出した。富山県越中八尾のおわら風盆は江戸元禄時代に起源を持ち、格子戸のある旅籠屋、土蔵造りの民家のたたずまいのまちを吹き抜ける二百十日の大風をおさめ、五穀豊穣を祈る市民の祭りであったが、観光バスが列をなす観光コンテンツとなった。

日本の全国各地にあった盆踊り、運動会が日系移民を中心に世界各地に広がり、日本の進出企業が地域とのコミュニケーションづくりや相互の文化交流に一役買っているばかりでなく「クールジャパン」として評価を得て訪日観光の一助になっている。マレーシアでは３万５０００人の世界最大の盆踊り大会が開催されている程である。

南北に長く豊かな自然と風土の営みから生まれた土地土地の祭りや遊び、生活の知恵の中から競技化したり、その土地ならではの魅力的なコンテンツを磨き、行事やスポーツ、ＳＮＳ等のツールを活用し発信することが重要である。

農業、牧畜、林業、水産業の体験民宿が新しい地域づくりの起爆剤として話題となり、その地域の人でさえ従来見向きもされなかった食材や普通の生活そのものまでが新たな観光産業コンテンツとしての価値を生み出し、地方創生のエンジンとなっている。

少子高齢化が著しい地方の過疎地域や小都市では、健康長寿で誰でも、どこでも、いつでも、いつまでもできる「４つのでも」スポーツを高齢者と若者、子供が一緒に参加できる生きがいづくりや交流の場づくりとしてとらえ、地域の資源を活用し知恵と工夫でオンリーワンのまちづくり、まちなおしのコンテンツとして創り出すことが重要である。

柏崎市のシティセールスとスポーツ振興

新潟県柏崎市は東日本大震災、福島原子力発電所の事故を踏まえ、「原発にたよらないまちづくり」を目指し、２０１２年に柏崎の多様な資源や資産を活用し、市の持つ魅力を再発掘、再編成し、市内外に発信する「柏崎シティセールス基本構想」を策定した。２０１４年には「柏崎シティセールス推進計画」を策定、実行推進体制として柏崎シティセールス推進協議会を設立した。

柏崎シティセールス推進協議会は市内の民間団体、企業、大学等の12団体で構成し、各団体や市、市民などが行っていた個々の取り組みを、多様な主体の相互連携や参加を促し、市民を挙げて魅力や発信をすることを始めた。

「市民一人一人がセールスパーソン」をスローガンに、推進協議会に運営委員会を設置し、市内の30～40代の若手10人をメンバーが、従来の行政手法にとらわれない柔軟で自由な発想で柏崎の魅力を磨き、創り、発信する、プロモーション活動を担うことになった。

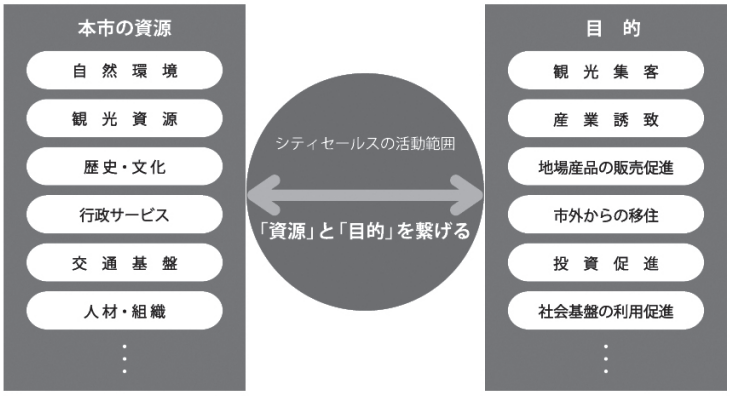
地方都市にありがちな豊かな自然や食文化を体験してもらい観光客を取り込むことや特産品の販売を目標とするのではなく、市民自らが自分のまちを見つめ直し新たな価値を創出し「訪れたいまち」「住みたいまち」「住み続けられるまち」を目指すものである。

市の産業・経済基盤となっている「原発」にとらわれない都市づくりは原発立地地域の共有する将来的な課題であり柏崎市のシティセールスはその試金石でもあると言えよう。

柏崎シティセールス推進協議会、運営委員会では先導的事業として、２０１５年度に「ＴＨＥ★オール柏崎プロジェクト」市民による市民のためのシンボルマーク総選挙を実施し、公募による作品３３２点を推進協議会で審査し、５作品を候補作品に絞り、市内90カ所に設置した市民投票、インターネット投票（投票数約１万７０００票）で決定した。

また、今年３月に東京・秋葉原で「ＴＨＥ★オール柏崎大交流会」を開催し、柏崎方式の市民型シティセールス活動を市内外に発信、活発化させている。

【シティセールスの全体像】



地形や地域資源を生かしたユニークな柏崎の市民スポーツ

柏崎市は長い海岸線と米山刈羽三山の豊かな水系に恵まれ「海のスポーツ・レジャー」や「水のスポーツ・レジャー」が盛んである。

柏崎は15の個性的な海水浴場があり、鯨波海水浴場、青海川海水浴場は「日本の渚・百選」、番神海水浴場、ウェストコート柏崎は「快水浴場百選」に選ばれ、北関東、甲信越からの海水浴客で賑わう重要な観光資源でありスポーツ・レクリエーション拠点だ。

柏崎港観光交流センター夕海（ゆうみ）は水上オートバイ、プレジャーボート、フィッシング、柏崎マリーナはクルージングやフィッシングの海洋拠点である。変化に富んだ海岸や海水浴場の地形や特性を生かし、ビーチサッカー、ライフセービングなどライフスタイルや嗜好の選択肢が多い。新潟県初の「海の駅」では「全国ご当地どんぶり選手権」でグランプリを獲得した「鯛茶漬」を始め、新鮮な魚貝類や地元の食材が楽しめる。

柏崎のスポーツレジャーを代表する２つの事例を上げたい。

・オリンピック代表を輩出した柏崎の水球

２０１６年リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックの出場権を32年ぶりに獲得した水球日本代表男子のナショナルテーム「ポセイドンジャパン」主将の志水祐介選手、メンバーの筈井翔太選手、棚村克行選手、保田賢也選手ら４人は併せてブルボンウォーターポロクラブ柏崎（ＢＯＵＲＢＯＮ ＫＺ）の選手であり「水球のまち柏崎」の知名度、イメージアップに大きく貢献した。

柏崎の水球は社会人チームＢＯＵＲＢＯＮ ＫＺを頂点に、大学、高校、中・小学校と広い据野のピラミッド構造を持ち、中・小学校では授業の一貫として水球を行うなど水球を通した体力向上やスポーツ振興、選手の育成などを図っている。

また、行政、学校、教育、地元企業、市民のサポートによるいわば、水球スポーツコミッションを形成し、全国からの水球、水泳等の合宿の誘致を行っている。

「水球のまち」を形成する核施設が柏崎アクアパークの日本水泳連盟公認プール（50メートル×25メートル水深2メートル）である。３月下旬～10月上旬に水球をはじめ水泳、シンクロナイズドスイミング等で使用し、冬はアイスホッケー国際規格のリンクとしてアイスホッケーやカーリングの練習場などとしてオールシーズン活用されている。

施設特性を生かし全国の水球や水泳の大会や試合を誘致すると共に各種教室や合宿の誘致を行い柏崎の交流人口、滞在人口を生み出している。

・地域ぐるみのユニークな演出とおもてなしの柏崎潮風マラソン

柏崎市を代表する「柏崎潮風マラソン大会」は地域ぐるみのユニークな応援演出とおもてなしで２０１５年の全国ランニング大会１００撰で人気上位の高得点を得ている。

全国ランニング大会100撰は、国内で開催されたランニング大会の中から参加ランナーの投票で選ばれ、ランナーを第一に考えた大会運営や個性が光る大会、ランナーの満足度に主眼が置かれ評価されるユニークな100撰である。日本のマラソン大会で最大規模の「東京マラソン」や伝統的な市民マラソンの「青梅マラソン」なども含まれている。

評価は①インフォメーション（事前の大会情報、スムーズなエントリーなど4項目）②会場（会場案内やトイレ等のサービスなど5項目）③スタート・コース・フィニッシュ（スタートエリアの管理、コースの走り易さ、楽しめるコース設定、応援、配水等の7項目）④記録・表彰（計測ポイント、年代別表彰区分等の4項目）⑤全体の感想（熱気や活気、地域の特色、コストパフォーマンス等の4項目）で総合得点100満点で評価され、「柏崎潮風マラソン」は96・4点を獲得した。特にホスピタリティや海岸線の変化に富んだコース設定、沿道のコミュニティーによるユニークな応援演出、工夫されたおもてなしに人気と特徴がある。



赤絨毯のゴールでは1人1人のゼッケンナンバーが読み上げられ、声援と拍手で讃えられる

全国40都道府県から3000人以上の参加者（2015年実績）を数え、海岸線～田園～野山へと起伏と変化に溢れるコースで、エントリー競技は「フルマラソン」「ハーフマラソン」「5キロファンラン」「12キロウォーク」「わんぱくひよこの部」など多様な世代が参加。コース上に名物スポットを設置し、柏崎の祭りの神太鼓、おもしろ看板、峠のサル茶屋などユニークで楽しい応援や、仮装だらけの配水ポイント、たけのこ汁のサービス、子供会エイド、フラワーガール、サックス演奏など市民・ボランティアのおもてなし競争で市民そのものがマラソンをサポート、自らも楽しんでいる。ハイライトは赤絨毯を敷いたゴールで参加ランナー全員のゼッケン番号を読み上げ「お帰りなさい」コールを送る。ランナーの満足度の高いランニングマラソンとリピーターも多く柏崎のファン獲得などの効果も大きい。

地域資源を生かしたスポーツイベントが地域を活性化する

スポーツ、レクリエーション、運動や遊び、更には一次産業やサービス産業、環境活動等も競技化・スポーツ化することで地域の活性化につながる。

1930年代のパリカフェのギャルソンが盆にグラスを乗せて優雅に走るウェーターズランナーはヨーロッパ全土に広がり、現在は横浜でも開催され、国際都市横浜のイベントとして話題となり、横浜の新たな観光コンテンツとなっている。

公益社団法人スポーツ健康産業団体連合会と一般社団法人日本スポーツツーリズム推進機構の「スポーツ振興賞」のスポーツツーリズム賞、スポーツとまちづくり賞にはユニークなスポーツイベントが受賞している。

「一般社団法人日本スポーツGOMI拾い連盟」の「ゴミ拾いはスポーツだ」は地域で行われているゴミ拾いとスポーツを融合させた競技であり、「ウルトラトレイル・マウントフジ実行委員会」の「10市町村が連携―日本最大100マイルトレイルレース」は、富士山麓、登山道、歩道、林道を走るレースで参加者と市民、ボランティアの交流の場として地域産品を提供し、海外メディアでも取り上げられ話題となった。

大型の国際スポーツイベントの経済効果が注目を浴びている。しかし、地方の市町村でのスポーツによる効果は、健康づくりや生きがいづくり、コミュニティーづくりなどの社会効果に軸を置き、その市町村資源である自然、歴史、産業、技術、生活、文化等を活用した競技化、スポーツ化を行う視点が大切であり、資源を生かすことがオンリーワンのスポーツイベントを生み出す。外部からの参加者が生まれることでネットワーク化や交流が進み、まちに人々が訪れることで経済効果、起業化、産業化効果が創れるものである。一つでも多くの地域がオンリーワンのスポーツイベントを創出することを願っている。

ゆっくり走って地域住民との交流や自然を体験
―住民と景観が育てる新スポーツ「マラニック」―



滝川市教育委員会社会教育課スポーツ振興係主事 ● 木村 直也

◆◆◆「日本で最も美しい村」を舞台に

滝川市は、札幌市と旭川市のほぼ中間に位置し、交通の要衝として栄えてきた人口約4万1千人の中空知地域の中心都市で、北海道を代表する味覚「味付けジンギスカン」発祥の地として有名です。

マラニックの開催地である江部乙地域は滝川市の北部に位置し、稲作や農作物の栽培が盛んな地域です。なだらかに連なる丘陵地には、日本一の作付面積を誇る菜の花畑や防風林に囲まれたりんご畑があり、人々の歴史と暮らしが生み出した景観や地域資源が評価され、平成27年10月、NPO法人「日本で最も美しい村」連合に加盟しました。「日本で最も美しい村」連合は、小さくても素晴らしい地域資源や美しい景観をもつ村の存続を目指して設立されたもので、今回の加盟により、全国的に江部乙地域の魅力が発信されることが期待されます。

◆◆◆マラソン＋ピクニック＝マラニック！

近年、全国各地でジョギング・マラソンの参加人口の増加や健康志向の高まりなどを背景にランニング大会が数多く開催されています。

競技的なランニング大会が増えていく一方で、幼児や高齢者などが気軽に参加できるランニング大会は決して多くありません。

「老若男女を問わず誰もが気軽に参加できるスポーツイベント」を市民に提供すべく模索していた中で辿り着いたのが「マラニック」というスポーツでした。

マラニックは、マラソンとピクニックを合わせた造語で、ゆっくり走ったり・歩いたり、時には立ち止まって周りの自然や風景、そして人々と触れあいながらゴールを目指すというスポーツです。順位やタイムを計測したりしないので、レクリエーション的なスポーツとして誰でも気軽に参加することが出来ます。

また、スポーツ体験の促進だけではなく、その土地でなければ体感できない地域の景観などを生かした観光体験や、参加者同士だけではなく、地域住民との交流といった交流体験など様々な体験活動をもたらす手段としての役割も期待されています。

当市では江部乙地域の丘陵地帯を活かしたマラニックを昨年5月に初めて開催しました。市内外から260



笑顔でスタート



老若男女を問わず参加

人の参加があり、幼児から高齢者まで幅広い世代の方に参加していただきました。

「創る」のではなく「築く」

えべおつ丘陵地マラニックでは「江部乙丘陵地を五感の全てを使って楽しんでもらう」ことをコンセプトとしています。

コースは舗装道路だけでなく、砂利道、草地、残雪などの上を通り、菜の花畑や森林に囲まれた道を、春の匂いを感じながら各々のペースで駆けていきます。普段は人があまり行き来しない場所もマラニック開催中は楽しげな雰囲気に包まれます。

また、コース途中に休憩ブースを設け、参加者に給水や応援などを行っています。さらに、休憩ブースごとに「おみやげ」として地元の味覚を味わってもらいます。昨年の大会では、江部乙産リンゴを使った「リンゴジュース」や、地元商店が作っている洋菓子「スコーン」、地元産の野菜として「アスパラ」などを参加者に配布しました。参加者からは「江部乙にこんなに美味しいジュースやお菓子があるとは思わなかった」「おみやげについてもっと詳しく教えてほしい」などといった嬉しい声を聞くことができました。

その休憩ブースは、地元住民の皆さんに担当していただきました。遠方からやってきた気さくな参加者たちと笑顔で言葉を交わし、飲み物・おみやげを提供し、「がんばれ～！」と大きな声で応援されている姿があちこちで見られました。

「参加する」側と「支える」側の両者が一体感を共有しながら笑顔になれる…これもマラニックの楽しさの一つです。

マラニックが新たな地域の魅力を創りだすのではありません。地元住民がマラニックの参画を通して、美しい景観や美味しい地産品、そして人々の温かさ…、これまで当たり前だと思っていた地域資源や住み慣れた場所が、魅力に溢れていることに気づき、地域への自信と誇りを持ち、その魅力を伝え築いていく。このことが、マラニック開催の大きな役割であると考えています。



休憩ブースで地元の味覚を味わう



最後尾の人も笑顔でゴール

地元の住民が主役になるイベントを目指して

いわゆる「村おこし」イベントとしてのランニング大会は、大都市近郊から、限界集落まで多くの市町村で開催されています。大会による地域貢献は、経済的な部分だけではありません。町の知名度を上げる、観光客を誘致する、ボランティア等を通じて住民の意識の高揚を図る、これらのことがあって、地域の活性化の期待が膨らみます。

大会の成功、不成功の判断基準は、参加者の大会への満足度やリピーター率というものによって測られることが多いですが、そういった外的尺度だけでなく、住民の意識や行動の変化、住民の満足度、住民の町への意識の変化といった内的な物差しで測られることこそが、地域の活性化の本質ではないでしょうか。

私たちは、マラニックという新しいスポーツを通じ、「日本で最も美しい村」に暮らす地域の皆さんが、参加者のサポートや沿道での応援など主体的に大会を支え、誇るべきふるさとの魅力を伝える一方で、参加した皆さんは体と心でその魅力を受け取ることができる、そういうスポーツイベントに育てていきたいという大きな夢を描いています。マラニックの精神のとおり、立ち止まって周りの自然や風景をながめ、地域の皆さんと触れ合い話し合いながら、地域づくりのゴールを目指したいと思います。

北の大地で美しくも激しい戦い「女だけの相撲大会」
―国内外から参加、国際色豊かに―



福島町観光協会会長 ● 河原塚　利雄

◆◆◆「相撲の町」福島

2人の横綱を輩出した「相撲の町」をご存知でしょうか。北海道は福島町。人口は約4500人、面積は187・23平方キロ、渡島半島の南端に位置し、大部分が山林で北には道南の秀峰大千軒岳がそびえ、南は紺碧の津軽海峡に面した自然豊かな町です。気候は対馬暖流の影響を受けて道南で最も高い平均気温を示し、年間を通じて温暖で快適な気候に恵まれているためヤマユリ自生地の北限となっています。

福島町は青函トンネル工事の際、北海道側の工事基地を担った町としても有名です。昭和39年から昭和60年の約24年間に渡る世紀の大工事から31年、今年3月26日に北海道新幹線が青函トンネルを駆け抜けました。この世紀の大工事を記念して建てられた「青函トンネル記念館」では着工から完成までの物語を展示資料や映像を通して体感することができます。

また、北海道ニシン漁の発祥地として江戸時代から明治時代に栄えた福島町は、現在も漁業と水産加工業が盛んで、特産品の「スルメ」は生産量日本最大級を誇ります。肉厚で素材の味を楽しむことができます。

◆◆◆相撲大会が目白押し

福島町は北海道初の横綱である「第41代横綱千代の山」と角界初の国民栄誉賞を受賞した「第58代横綱千代の富士」の生誕地で「横綱の里」として知られています。町のメーンストリートには二大横綱の功績を讃えた「横綱千代の山・千代の富士記念館」があり、館内では2人の力士が横綱になるまでの険しい道のりを展示品と映像で体感することができます。

春から夏にかけては相撲大会が目白押しです。5月の母の日「北海道　女だけの相撲大会」に始まり、6月は「わんぱく相撲　函館場所ふくしま大会」、7月は「千代の富士杯」。小学4・5・6年生が出場するわんぱく相撲の優勝者は全国大会へ出場することができます。日頃の稽古の成果を存分に発揮して取り組む姿は大人顔負けです。千代の富士杯には全道各地、及び青森県から多くの人が参加、北海道と青森のレベルの高い相撲を見ることができます。そして、8月は九重部屋の夏合宿が行われ、横綱記念館の稽古土俵では力士たちの激しいぶつかりあいが繰り広げられるなど、迫力ある朝稽古を見学することができます。相撲好きには必見です。運が良ければ本物の力士と記念



相撲大会を前に、川濯神社への参拝



開会式での祈祷

写真も撮れるかもしれません。また、町内の横綱橋の欄干には土俵入り姿を模したレリーフがはめ込まれ、街灯の装飾には軍配のミニチュアを施し、地面には土俵が描かれており、町中で「横綱の里」を感じることができます。

◆◆◆ 女性が主役の相撲大会

毎年、母の日に開催される「北海道　女だけの相撲大会」は文字通り女性が主役の相撲大会です。「はっけよい！」の掛け声で行事の軍配があがる。女相撲はスピード相撲で、とにかく勝負が決まるのが早いです。上手投げや引き落としなど技も多彩で、力士というよりアスリートです。近年では外国人女性の参加も多くなり、四股を踏む仕草もどことなく愛くるしく感じます。桟敷席からは「がんばれ！」「負けるな！」などの声援が飛び交い、惜しくも負けた力士にも万雷の拍手が送られます。

相撲大会の参加者は取組前に全員で福島大神宮の境内にある川濯（かわそ）神社に参拝します。川濯神社には女性守護の神様を祀っており、境内にそびえ立つ樹齢約３５０年の御神木「乳房桧」がその象徴となっています。根元の部分が膨れ上がっており、乳房のような形をしていることからこの名が付けられたと言われています。明応元年（１４９２年）の福島大神宮の再建時に母体安全、子孫繁栄などの祈りが込められて奉植され、松前藩四代目藩主の奥方も祈願したと伝えられており、この幹を触ると乳の出が良くなるといわれ、参拝に来る方も多くいます。この女だけの相撲大会は川濯神社が創建５００年を迎えた平成３年に、奇祭「女だけの祭礼行列」の奉祝奉賛行事として福島大神宮境内の土俵で相撲が行われたことが始まりです。

◆◆◆ 涙と笑顔の名勝負

女性の神様に見守られての大会は福島町鏡山公園土俵にて行われます。勢揃いした女性力士の中には外国人の参加者も多く、アメリカやカナダなど国際色豊かな大会となっています。18歳以上の女性なら誰でも参加可能で、それぞれがユニークな「四股名」で相撲に臨みます。

四本柱が立つ土俵を囲むように階段状に観戦席が設けられ、５００人を超える観客で超満員となります。２つのブロックに分かれての予選トーナメントが始まります。大会Ｔシャツに相撲パンツを穿いて戦います。優勝賞金10万円を目指して、男顔負けの技の応酬、北海道新幹線を彷彿させるような恐れ知らずの突進相撲などで会場を大いに沸かせます。

大会の見所は女性たちの熱き戦いだけではありません。取組を取り仕切る行司もまた見所です。行司の面白おかしいトークが会場を笑いの渦に巻き込みます。

待ちに待った決勝トーナメント。決勝まで勝ち上がってくるには、技のキレ味や運も必要ですが、相撲といえばやはり「重量」です。毎年決勝まで勝ち上がる力士の多くは重量級です。前大会で大会史上初の３連覇を達成した「おでぶ山」は大会の常連です。今年も彼女の取組に観客の目も釘付けになるでしょう。

今年の大会は5月8日に開催予定です。今年も全国各地から強者が参加して熱い戦いを繰り広げますので、ぜひ母の日は福島町の「女だけの相撲大会」を観に来てください。



外国人参加者の取組



取組風景

人間愛がテーマの国際交流・スポーツイベント
―米国姉妹都市までの距離を泳ぐ水泳駅伝―



つがる市商工観光課課長補佐 ● 葛西 兼光

旧車力村（現・つがる市）の国際交流は「チェスボローカップ水泳駅伝」に始まったといっていいのではないか。100年以上前の明治22年、旧車力村が誕生したその年10月30日、早朝、そこに村人たちが見たもの、そしてその後にとった行動が語り継がれ、村人たちの心の奥底に人間愛として刻みこまれました。

◆◆◆ チェスボロー号遭難事件

耳を塞いでも眠れないほど強い沖鳴りがする朝、牛潟集落の漁師たちは、約300㍍の沖合に巨船が一隻難航しているのを発見しました。土地の人々が最も恐れる魔の浅瀬に乗り上げ、船は転覆寸前の状態だったのです。

漁師たちは大騒ぎで岸辺に出て巨船の甲板を見ると、異様な人相をした外国人の乗組員ばかりで帆柱は吹き飛ばされ、帆はズタズタに切れていました。手の施しようもない恐ろしい惨状に誰もが立ちつくすばかりでしたが、しかし、海に生きる人たちの本能で、漁師たちは荒れ狂う波と暴風の中に小さな磯船を漕ぎ出していきました。妻子は食糧と燃料、防寒衣を素早く運びました。村の触れ太鼓が打ち鳴らされ、村人による決死の救助活動が始まりました。乗組員の多くは既に波に飲まれた後でしたが、わずかに4～5人の人影が波間に見えました。1人が辛うじて自力で泳ぎ着き、溺死寸前の3人も漁師の船によって救出されました。結局4人が漁師の勇気ある行動により救助されました。意識がなく危篤状態に陥った1人を、漁師の妻が人前もはばからず、前肌を広げ抱きしめました。彼女の温かい血潮と深い人間愛によって乗組員は一命を取り留めました。助けた村人たちの心にも助けられた乗組員たちの心にも大きな感動が生まれました。



スタートの瞬間



水泳駅伝の競技風景

双方ともに言葉が通じないため、村の婦人たちは身振り手振りで食事を勧め、4人はそれに応じました。言葉はわからなくても誠意ある心は通じて、次第に笑顔が飛び出し、乗組員と村人たちの心温まる時間が流れました。

電話も自動車もなかった時代に村一番の健脚者の若者2人が青森県庁まで約64㌔の道程を走りました。3日後、奇跡的に救助された4人は米国に帰国しました。

◆◆◆ きっかけはチェスボロー号遭難100周年

チェスボロー号遭難事件は人間愛の真実として語り継がれています。

昭和45年8月、高山稲荷神社付近に石造の白い十字架祈念碑が建立され、駐日米国大使を始め、青森県知事ら約200人が列席し遭難80周年慰霊祭が盛大に執り行われました。

勇気と人間愛を象徴する村民の精神と行動力は、次代を担う子供たちへ受け継がれ１００年以上経った今でも教育、文化、スポーツに生きています。



つがるライフセービングクラブ会員



水泳駅伝ゴールの瞬間

◆◆◆キャッチフレーズは「勇気と愛は海を越える」

チェスボロー号の母港がある米国メーン州バス市との交流が次第に深まりを見せ、姉妹都市の提携による親善交流も盛んに行われるようになりました。その一環として平成2年から始まったのが、全国各地からたくさんの参加者が集う「チェスボローカップ水泳駅伝」です。旧車力村と固い絆で結ばれたバス市との直線距離にあたる1万200㌔を参加者の合計距離を毎年累計して泳ぎ切ろうという、旧車力村の精神を代表しているともいえる真夏のイベントです。現在までの泳いだ通算距離は５５２５・32㌔で、バス市までの目標距離まで４６７４・68㌔であり、予想では、あと20年以上かかる見込みとなっています。

1チーム5人で参加し順位を争うイベントでありながら「勇気と愛は海を越える」というキャッチフレーズのもとに、老若男女が真夏の同じ時間を共有し、参加者全員が目指す大きな夢とチェスボロー号がきっかけとなった精神を未来に伝えるチャレンジでもあるのです。

◆◆◆課題はスタッフの高齢化と人材育成

大会を運営しているチェスボロー倶楽部のスタッフの高齢化と次世代への人材育成がうまくいっていないのが、現状であり、この解決も必要です。この時期は県内でも主要なイベントが開催されるため、イベントへの参加者が分散される傾向にあります。

大会を行うためには、チェスボロー倶楽部会員や、つがるライフセービングクラブなどのボランティアの他にも医療、行政、消防、警察、自衛隊及び住民の協力が不可欠です。バス市とのつながりはもちろんのこと、その他地域住民とのつながりも重要になってきます。テーマにあるように「勇気と愛は海を越える」は、世代も時代をも越えていきます。最終目標の到達点にたって振り返ればほんのわずかな時間でも、今までの26年間は長い年月となります。

今後のチェスボローカップ水泳駅伝大会を開催するためには、前にも述べた高齢化の解消のため、若い世代にもチェスボロー倶楽部の会員としての登録をお願いしながら、大会運営に携わってもらい、後継者となってほしいものです。

また、大会への参加チームについても、倶楽部のインターネット及びポスター、チラシを活用しながら参加チームの増加につとめ、バス市までの最終目標である距離を早期に達成したいものです。

◆◆◆米国バス市との強い絆

最後になりますが、二つの国はお互いに友情を支え、深める努力をしていますが、市民はバス市の中学校の生徒を受け入れることによって大きく貢献しています。車力、バス市の両中高生の交流は、お互いの文化を尊重し相互理解を促進させることの価値を教えてくれています。

未来が抱える困難に立ち向かうときにつがる市とバス市は強い絆で結ばれています。

千四百年の歴史に包まれた2446段の石段にチャレンジ！
―悠久の歴史と祈りと修験の道を走って地域を元気に―



出羽商工会東部センター長 ● 安達 一春

出羽三山の麓に位置する鶴岡市羽黒地域は山岳修験の霊場として全国的に知れわたっています。羽黒地域は観光地であるとともに典型的な農村地帯でもあり、稲作を主に当地域の特産物である庄内柿やブルーベリー、アスパラガス等の生産が盛んです。また、映画の撮影が盛んに行われており、ロケ施設を見学に訪れる観光客や精進料理を提供する宿坊も連なり、長い歴史と豊かな文化、雄大な大自然に囲まれた地域の資源を積極的に活用した観光振興に取り組んでいます。最近では、出羽三山がミシュラン・グリーンガイド・ジャポンで三ツ星に選ばれた効果もあり、インバウンド観光が年々盛んになっています。

◆◆◆ 羽黒山石段マラソンのルーツと魅力あるコース

平成13年に合併前の当時の羽黒町商工会の有志が町内の行政・地元高校・体育協会・走友会等の関係機関や町民ボランティアから支援を受けて実行委員会を組織し、2446段の石段を一気に駆け登る大会の第1回を国や羽黒町の地域振興活性化事業補助金を受けて開催しました。商工会会員有志が町の歴史資源を活用して元気にしようという気持ちと、羽黒町を全国に発信するイベントとして取り組むという熱い気持ちが大会を継続させてきたのです。

マラソンコースは日本一といわれる大鳥居がスタート地点。手向地区の歴史的風情を感じる宿坊街を一気に駆け抜け、随神門から始まる全長1・7キロの2446段の石段は、樹齢千年以上といわれる杉並木の中を駆け抜けるようにして登ります。

◆◆◆ 山岳信仰の聖地を走る

「西の伊勢参り」に対し「東の奥参り」とされた出羽三山は羽黒山が現世、月山が前世、湯殿山が来世、すなわち三世の浄土を表すとされます。江戸時代は羽黒山から入り、月山で死とよみがえりの修行を行い、湯殿山で再生するというのが一般的な巡り方で、生まれ変わりの意味をもつ「三関三度」の旅とされました。遥か古から多くの庶民が憧れ、巡礼として歩いた歴史の道を一気に駆け抜けようというのが「羽黒山石段マラソン全国大会」の魅力です。僅か6キロのコースの中、2446段の石段は私達の人生の高い壁のごとく立ちはだかり、ここを走りぬくことが「新たな気持ちに立ち返れる瞬間」であり、「生まれ変わるための大会」でもあるのです。

◆◆◆ 悠久の歴史に包まれた羽黒山



開会式で山伏より安全祈願



山伏のほらがいによるスタートの合図

れる爺杉と樹齢５００年の杉並木、そして東北では最古の塔である国宝の五重塔などの美しい文化財に囲まれ、神聖な空気に包まれたマラソンコースとしては全国に類のないコースです。石段は一の坂に始まり、「油こぼしの坂」と呼ばれる二の坂が最大の難所であり、三の坂まで鬱蒼とした杉林の中を一気に駆け上がる言葉に出来ないくらい大変過酷で厳しいコースです。

元オリンピック選手も参加

15回大会は昨年の10月18日に開催されました。大会開催ポスターは地元高校の美術部員が担当、杉板製の賞状は商工会工業部会の大工さんが担当、大会の賞品も地元産の新米、庄内柿、日本酒等地元の特産品で統一した羽黒町の地域性を生かしたものになっています。大会参加者は２４２人と決して多くはありませんでしたが、北は青森県、南は香川県と全国各地から参加。参加者の年代も、男子の最高年齢が77歳、女子の最高年齢が65歳と幅広いものとなりました。クロスカントリースキーで冬季オリンピックに出場された方、箱根駅伝で活躍された方なども参加しました。

出羽三山神社山伏が参加選手の完走と安全を祈願、選手の身体に染み渡るようなほら貝の音でスタート地点の大鳥居へ移動。午前10時の時報を合図にスタート。ゆるやかな上り坂を走りきると宿坊街。地元の方々や参拝客が拍手で迎えます。石段上り坂口では地元羽黒太鼓の子供達が太鼓の演奏で必死に走る選手を鼓舞させてくれます。国宝五重塔からは２４６段の石段が待ち受けています。石段を歩く参拝客が声援をかけてくれ、歩いても大変な一の坂から二の坂、三の坂と一気に走りぬけます。難所の「油こぼしの坂」では声も出せない程体力を消耗していますが、それでもゴールの山頂を目指します。



羽黒太鼓こどもクラブも応援



最もつらい「油こぼしの坂」



完走しました！

今大会の１位の記録は27分11秒。大勢の関係者や参拝客がゴールで待ち構え、閉会式会場では地元のお母さんたちが、山形名物の芋煮と庄内柿をふるまい、記録の集計がまとまるまでは地元おやじバンドがライブで走りきった選手を癒してくれました。今大会も参加選手全員が完走し満足感あふれる笑顔で閉会することができました。

新たな視点で大会運営を再検討

15年間続いてきた大会が果たしてきた役割は大きく、商工会が目指す地域振興事業としても一定の評価を得てきました。大会が羽黒町を元気にするイベントでもあり、地域住民との絆を保持すると共に大会を通して情報を発信する大きな役割を果たしてきましたが、第16回大会を最後にその後の大会開催について見直さなければならない状況にあります。主催団体である商工会が平成20年に合併、商工会羽黒支所の運営体制が職員１人という状況にあり、支所自体の存続も危ぶまれている状況です。現在も他の支所の職員がサポートしながらの大会運営ですが、大会を継続していくためには事務局の役割が重要であり、事務局を担当できる団体が手を挙げなければ大会の存続は無理でしょう。羽黒地域の大会としてではなく、鶴岡市全体の大会として存続できないか知恵を絞って関係団体と協議していく考えです。第16回大会は今年10月９日（日）の開催予定。全国各地のマラソンを愛する皆様、悠久の歴史と杉並木、そして２４４６段の石段が皆さんの挑戦を待ち受けています。

ゴミ拾いをスポーツ化して地域の課題を解決
―世界で一番地球にやさしいスポーツ―

一般社団法人日本スポーツGOMI拾い連盟代表 ● 馬見塚 健一

◆◆◆ エキサイティングなボランティア活動「スポGOMI」

「スポGOMI」は、地域の社会課題である「環境保全活動（ゴミ拾い）」を、人任せにせず、自分たちの汗と情熱で解決しようという活動です。2008年5月に活動が始まり、2015年12月までに全国で450大会、約4万人の方々がスポGOMIに参加してくれました。

予め決められた競技エリアで、制限時間内に、チームが力を合わせゴミを拾い、その質と量を競い合うという、とてもエキサイティングなボランティア活動です。スポーツマンシップに則り、「ルールを尊重する」「相手を尊重する」「審判を尊重する」という基本精神をルール化し、楽しみやワクワク感の中で改めて自分たちの街のゴミ問題に向き合ってもらうことを目的としました。今までのゴミ拾いにない「スポーツ」と「エンターテインメント」というキーワードが、環境保全活動（ゴミ拾い）に一度も参加したことがない人の参加動機に繋がり、その後の環境意識の向上に大きく影響しているとの研究調査結果を得ることができました（2010年～2012年 国立環境研究所調べ）。

◆◆◆ スポーツという言葉がモノの価値観を変える

15年前、起業のため30歳で九州から東京に出てきた私は、都会での生活になかなか順応できませんでした。そんな中、自分自身を見直そうと始めたのがランニングです。自分のことだけにしか向いていなかった心の眼が、ランニングの中で次第に外に向き始めた時、最初に気になったのが毎日捨てられている街のゴミでした。

朝の清々しい空気を汚すゴミが気になり始め、取りあえず目に付く身の回りの環境を整えようと始めたのが、ゴミ拾いです。しかも、単にゴミを拾うのではなく、トレーニングしながら拾うことを始めてみました。

ランニング中に前方に落ちているゴミに狙いを付け、できるだけスピードを落とさないようにソレを拾う。次のゴミは利き手ではない方の手で拾ってみる。出来るだけ腰を落とし、大胸筋を意識しながら拾ってみるなど…。そうするうちに、今まで「汚い」と感じていた街のゴミが、自分の中で「ターゲット」となり、ただ汚いだけの存在ではなくなってきました。さすがに街に捨てられているゴミには嫌悪感を覚えますが、拾うという行為を意義をもって捉えられるようになっていきました。「スポーツという言葉が、モノの価値観を変える」。そんな感覚を自ら体験した瞬間でした。同時に「ゴミ拾いをスポーツ化すれば、今までボランティアに参加したことのない人の参加動機になるハズ。一度、試してみたい！」という想いにかられ、ゴミ拾いを競技化しスポーツとしてのルール作りを始めました。

◆◆◆ 世界で初めてのスポーツとゴミ拾いの融合

世界で初めてスポーツとゴミ拾いを掛け合わせた「スポGOMI」の開催に向け、まず始めたのはルールづくり。どうやったらゴミ拾いが競技となるか?どうしたらオモシロくなるか?適正な競技時間と人数は?安全面は?ゴミを集めた結果をどうジャッジするか?開会式、表彰式はどうする?など決めなければならないことが山積みでした。

開会式の会場候補を東京・渋谷区役所隣りの渋谷公会堂前広場とし、同区役所へ使用許可をもらいに伺ったところ「ゴミ拾い活動だったら貸し出せるが、路上でスポーツをする団体には許可は出

せない」と拒否されました。「そんなゴミ拾いは聞いたことがない」「実績がない」がその理由でした。その後も担当者に念入りに説明し、ようやくこの会場を使用する許可をいただきました。

第1回大学対抗スポGOMI拾い大会開催

この、世界で初めての試みは、都内8大学から、競技者56人、審判員8人の参加で開催を迎えました。初めてのスポGOMIは果たして盛り上がるのか？私にとっては実験でした。当日は雨にもかかわらず8大学すべてが参加。開会式、選手宣誓、作戦タイム、60分の競技の後、記念すべき、第1回スポーツGOMI拾い大会で優勝したのは、日本女子体育大学のバスケ部チーム。大会で集めたゴミの総重量は約120キロ。そのうち約60キロを拾ったのが日本女子体育大学でした。

そして、その後のインタビューにて。

記者「優勝、おめでとうございます！よくゴミ拾いはよくやってるの？」

学生「ゴミ拾いは、初めてです」

記者「え？それではなぜ参加しようと思ったの？」

学生「スポーツだから参加しました。仲間と楽しく出来るし」

この一連のやり取りを聞いていた私は、スポーツという言葉の持つ力、スポGOMIの可能性を強く感じました。それは、私の実験が成功したことの証しであり、同時に「この活動は、続けていく価値があるな。」と確信した瞬間でした。

スポーツ GOMI 拾い大会の風景



競技開始前の雄叫び



作戦会議



集めたゴミの計量

ボランティアのその先にあるもの

スポGOMIは、スポーツを通してゴミ拾いの価値観を変えました。競技の中で自分の街のゴミの現状に向き合い自発的に環境意識を養ってもらうという目的だけでなく、開催することで生まれる地域住民同士のつながりに、街がきれいになること以上のメリットがあるように感じられます。スポGOMIは、健康維持のための「スポーツ」、街の環境保全のための「ゴミ拾い」と、どこでも掲げる2つの課題に直接アクセスできるため、自治体だけでなく、商店街や婦人会・老人会などの地域の各種団体、学校、地域の企業などが積極的に協力し、参加してくれる姿がよく見られます。同じ町で暮らし、同じ町で仕事をする人たちが集まる大会会場では、参加者同士が楽しく会話し、競い合い、称えあうことで清々しいコミュニティーが広がっています。そして、ここでのコミュニティーが、その他のイベントや催し物でも協力し合える関係に成長している様です。まさに、最近失われつつある「地域力」を育てる場、「地域創生」の場として、スポGOMIは最適なのではと強く感じています。

そして今、私たちは新たな展開として「スポーツの力で、地域の社会課題を解決する」をテーマに、ゴミ拾い以外の社会課題の解決にアタックし始めています。

豪雪を生かしてスポーツ雪合戦
―地域の交流・活性化や観光資源にも―



魚沼市商工観光課 ● 渡部 麻美

いざ決戦の地へ！

「投げて投げて投げて、ぶつけろ～」と、魚沼市の雪のコロシアムにおなじみのメロディーが響き渡る。「あんさ&おっさ」という地元出身のユニットが歌うこの歌は、28年間続く小出国際雪合戦のテーマソング。開会式で流れるこの歌を皮切りに、いよいよ雪合戦の戦いの幕が上がる。

山紫水明・豪雪のまち、魚沼市

小出国際雪合戦は、毎年2月に県立奥只見レクリエーション都市公園「響きの森公園」で開催される雪合戦の国際大会です。会場である魚沼市は新潟県の南東部にあり、「おかずがいらないほどおいしいお米」魚沼産コシヒカリの産地や、日本有数の豪雪地帯として知られています。東京駅から上越新幹線で約1時間半、関越自動車道で小出ICまで車で約3時間と、関東からアクセスが良く、雪合戦の参加者には関東の方も多く見られます。冬は一面に広がる雪景色、春から夏にかけては魚沼から行く尾瀬国立公園、秋は奥只見湖の遊覧船からの紅葉と、四季の魅力に溢れたまちです。また湯之谷温泉郷を中心とした個性豊かな温泉にも恵まれ、多くの観光客が訪れます。

小出国際雪合戦の発祥

国内で開催される雪合戦大会は、主なものだけでも昭和新山国際雪合戦、長野県白馬村の日本雪合戦選手権大会など多くありますが、小出国際雪合戦は、その中でも特に歴史が長い大会として知られており、平成28年で第28回の開催を迎えました。

第1回大会を開催した平成元年に「地域の元気を掘り起こそう」という狙いの元、魚沼ならではの雪を使ったイベントができないかと、地域の若者と市役所の職員が中心となって発案されたのがこの小出国際雪合戦でした。子どもの遊びである雪合戦をどのように大人が楽しめるスポーツにするか、知恵を出し合いました。その取り組みは大きく注目され、NHKの密着取材が行われたり、2時間特集番組が放送されたりと、メディアの力を借りて全国的に一気に知名度を上げました。この記念すべき第1回は、少雪によりダンプカーなどで雪を会場に運びこんだことでようやく開催にたどり着き、伝説の第1回大会となりました。



魚沼の自然　銀山平滝雲

それから参加者数は増加の一途をたどり、第28回大会においては、大人の部186チーム、子どもの部21チームと、約1000人が選手として参加しています。参加チームの募集を開始してから約1週間という早さで200チームの枠はほぼ埋まり、キャンセル待ちのチームが後を絶たないほど、魚沼の冬を彩る人気イベントとなりました。

地域への思いを形に

すでに集客力のあるイベントではありますが、運営の主体である小出商工会青年部は更なる向上を目指し、例年、約半年前から毎週のように運営会議を重ねています。今年の雪合戦委員長を務め

た青年部員の今井清司氏は、「28年も続くイベントを取り仕切ることに、少なからずプレッシャーのようなものはあった」と、委員長として務めた1年について語ります。今年も第1回大会同様、例年にない少雪で開催自体が危ぶまれましたが、周辺の雪を会場内に入れることでどうにか開催することができました。加えて今井氏の発案により、今年から決勝トーナメントではコート内の盾の数を減らして白熱した試合展開となるような工夫をしたり、ヘルメットの着用を義務付け、安全面への配慮をさらに重ねたりしました。今井氏は「雪合戦はその当日だけのイベントではない。若者なりの地域への思いを形にしたかった」と話します。その思いは、約10年前から始まったWE LOVE SNOWBALL FIGHTキャンペーンという商店街の活性化企画にも活かされています。

◆◆◆ 地元商店街と連携

WE LOVE SNOWBALL FIGHTキャンペーンとは、魚沼市全体を巻き込んだ抽選会の企画です。雪合戦前の約2週間に、小出商店街を中心とした提携店で買い物をするともらえる抽選券3枚で、雪合戦会場で豪華景品が当たる大抽選会に参加できる仕組みとなっています。第28回大会では40店舗、3団体、3施設の協力がありました。抽選会の商品も、地元の特産品の商品券等が中心となり、経済効果を生み出しています。当日は地元企業を中心に「うまいものストリート」と称した露店市が並びますが、この露店でも同様の抽選券を受け取ることができます。この取り組みによって地域住民が雪合戦会場に足を運び、また商店街が一丸となって雪合戦を支える仕組みができました。例年この企画は盛り上がりを見せていますが、参加店舗の増えた今年は例年以上に大盛況でした。

◆◆◆ 魚沼ファンになる、前夜祭の魅力

「雪合戦は当日だけではない」と今井氏が話すように、前日には「前夜祭」と呼ばれる交流会が開催されています。この交流会には、選手だけではなく、地元住民も参加し交流を図ります。かつては雪合戦にちなんで「酒合戦」と呼ばれ、会の最後には肩を組みながらの大合唱が恒例となり、相当な盛り上がりを見せています。例年出場している選手の中には前夜祭に参加するために雪合戦に来るという方も多く見られるほどです。前夜祭への参加は宿泊客の増加にもつながっており、今年は約250人が魚沼市内の宿泊施設を利用しました。選手も、地元の人も、心から楽しめるこのような交流こそが、魚沼ファンを増やすことにつながっています。

◆◆◆ 地域のことを考えるきっかけに

魚沼市は、6町村が合併し今年で市制11年を迎えます。現状ではこの雪合戦も他のイベント同様、旧町村ごとの特色が強いですが、いつかその垣根を越えて、魚沼市の若者全員が関わるイベントに昇華させていくことが今後の課題となります。県立小出高校野球部の生徒が10年前からボランティアで参加してくれているように、このイベントを通じて自分の地域について考えることが、地方創生の地域活性化への第一歩につながるはずです。来年の国際雪合戦は、コート数を増やし、参加チーム数も増やし、さらに楽しめる企画を用意して皆様をお待ちしております。ぜひ一度、冬の魚沼へお越しください。



国際雪合戦会場の様子



国際雪合戦



雪合戦を盛り上げるコスプレコンテスト

地元高校生考案の「まくら投げ」が人気イベントに！
―伊東温泉で全国大会を開催、ネットに動画をアップ―



伊東市観光課企画宣伝係　主事兼まくら投げ主審　●　栗原　扶美代

当市が全国で初めてまくら投げを競技化するきっかけとなったのは、平成22年10月に開催された、高校生の斬新な発想力を競い合うプレゼンの全国大会「デザセン２０１０（全国高等学校デザイン選手権大会、主催：東北芸術工科大学）」で、地元の伊東高校城ヶ崎分校の生徒が考案した「まくら投げのすすめ」が、準優勝・市民賞・高校生賞を受賞したことです。

伊東高校城ヶ崎分校は、同大会の常連校で、当時、指導を担当していた大津忍先生にお話しを聞いたところ、プレゼンの題材を決める方法として、生徒でしりとりを行い、たくさんのワードを出し、その中でおもしろそうなワードを題材にしているとのことでした。「まくら投げ」を題材として決定したのには、①嫌なことを忘れて夢中で枕をぶつけ合う充実感がストレスの多い現代人に必要②子供から大人まで誰でも楽しめる③地元伊東市が温泉地でもあり地域おこしも期待できる、という生徒達の想いがありました。

◆◆◆ 伊東温泉に全国から57チームが参加

修学旅行の思い出といったら「まくら投げ」を思い浮かべる人が多いのではないでしょうか。そんな懐かしさも感じる「まくら投げ」を当市では、スポーツとして競技化し、平成25年から全国大会を開催しています。

平成28年2月27日、28日に開催した「第４回全日本まくら投げ大会ｉｎ伊東温泉」には、北海道から鹿児島県まで、日本全国から57チーム、約４５０人が参加し、日本一の称号を得るために、白熱した試合が繰り広げられました。

たかがまくら投げと思いきや、選手の皆さんは真剣そのもの。試合開始の合図とともに力いっぱい枕を投げ合い、飛び交う枕をよけながら繰り広げられる真剣勝負は、見る人も魅了しました。

◆◆◆ 地元高校生が考案した「まくら投げのすすめ」

「まくら投げのすすめ」の提案を踏まえ、特に若者への当市の認知度アップや伊東温泉の魅力を発信するために、新たな観光イベントとして、まくら投げの競技化を進め、平成25年2月に「第１回全日本まくら投げ大会」を開催しました。

第１回大会では、「まくら投げのすすめ」で提案された内容から大将戦を採用し、一般の部（６チーム）、子供の部（６チーム）、大学対抗の部（６チーム）の３部門で開催しました。

年々人気が上昇し、出場希望者が増えてきたことをふまえ、第４回目を迎えた今年、一般の部

◆◆◆ まくら投げ大会の実現



全日本まくら投げ大会開会式の様子（一般の部 48 チームが参加）



一般の部決勝戦の様子



勝利に歓喜する選手たち

（48チーム）、子供の部（9チーム）の2部門で、2日間開催とし、より多くの人が参加できるように大会の規模を拡大しました。

◆◆◆ 綿密に考えられたルール

会場は、修学旅行でのまくら投げに近い雰囲気を出すため、体育館に畳を敷き、選手は浴衣を着用します。基本的なルールは、1チーム8人編成（内選手5人、サポート3人）で、各チームの中から大将を1人決め、ドッジボールのようにそれぞれのコートに分かれて枕を投げ合う「大将生き残り戦」です。つまりは、枕を投げ合って大将に当たるか、終了の合図の時に残っている選手の数で勝敗を競います。

この「まくら投げ」の難しいところは、枕をキャッチしてはいけないところ。枕が目の前にくるとついつい、キャッチしてしまいがちですが、キャッチすると「アウト」になってしまいます。

そして、試合を盛り上げるユニークなルールとして、「先生がきたぞ～！」コールがあります。各チームが1試合の中で1回だけコールすることが出来ます。このコールを宣言されたら両チームの生き残っている選手は、10秒間正座をし、その間にコールをしたチームの大将が相手の枕を回収することができる、一発逆転も可能な「必殺技」です。

また、布団を壁にして相手側の攻撃を防ぐことのできる防御専門の「リベロ」を作るなど、「まくら投げ大会」をよりよいものとするために、できるだけ本来のまくら投げに近い雰囲気を残しつつ、「もっとこうしたほうがおもしろい」など、出場者が楽しめるようルールを、まるで自分たちが出場するかのように、楽しみながらアイディアを出しあい考案しました。第3回から基本のルールを確立し、各選手の分担、コートの規格、相手の倒し方、防御方法、大将の動きなどを細かく設定し、体力のみならず戦略も勝敗を分けるポイントとしました。

ルールについては、出場者がわかりやすいように、市職員のボランティアにより、実践形式での動画を作成し、Ｙｏｕ Ｔｕｂｅにアップしました。動画をインターネット上にアップすることで、ルールを研究して大会に挑むチームもあり、また大会の認知度も増しています。

◆◆◆ 地域に根付くイベントとなるように

まくら投げをスポーツとし、白熱した試合を繰り広げた結果、選手は、相手チームを称え、観客は拍手や声援を送る。そんな一面も見られました。選手同士の絆が生まれ、互いに来年もまくら投げ大会に参加し、再戦を誓い合うチームも。このように、スポーツを通して生まれる絆を大切にし、交流の輪が広がっていくことを期待します。

そして、まくら投げ大会がきっかけとなり、伊東を知る人、伊東に来てくれる人が増えることは、この大会を主催する側としては大変喜ばしいことです。この「全日本まくら投げ大会・ｉｎ伊東温泉」が地域に根付くイベントとして、活力ある地域づくりの一環として、更なる躍進を続けていけたらと思います。

スポーツフィッシングで地域振興
―ルアー釣りやカジキ釣り、海を活かした「まちづくり」―



マリンスポーツフェスティバル実行委員会委員長
すさみ町観光協会会長
● 朝本 紀夫

◆◆◆ 古くからの釣りの町

マリンスポーツ振興に取り組んだのは平成7年です。当時、地元商工会青年部が地域活性化に「イノブタダービー」を実施、2万人前後の来訪者があり一定の効果がありました。しかし、1日だけの一過性ということで、年中経済効果が期待できるものとして取り組んだものです。

すさみ町は古くから釣り（主に磯釣り）の盛んな町で多くの釣人が訪れていました。私は24年間共同経営してきたバス・タクシー事業から身を引き、平成5年新たに起業したのが「体験釣り事業」でした。それも、従来の釣りでなく新たな釣りとしてルアー（疑似餌）釣りやカジキ釣り（ビルフィッシュ）体験など、スポーツフィッシングを進めることとしました。船も漁船でなく小型クルーザーを購入。当時、近隣の釣具店にはルアー用品は販売されてなく大阪からの購入でした。当然、和歌山県内にルアー船もなく、また、釣りをするにあたってポイント（海底の岩礁等）探しが重要ですが、そのポイントも簡単には教えてもらえず、独学で300ポイント余設定といろいろ苦労しました。

◆◆◆ 体験観光漁業としてスタート

ルアー釣りは、ルアーを海底に沈めシャクリ上げる釣り方で、エサも撒餌もいらず、ヒットすると強烈な引きの体感があり、何とも言えない醍醐味です。この体感をぜひ、多くの方に味わってもらいたい！何とか情報発信したい！当時はパソコンもなく、唯一写真を、近畿圏内のショップ50～80店舗へ月2～3回のペースで発信し続けました。この体験釣りを地元漁業者向けの体験観光漁業として漁業振興に生かせないかと取り組んだのが、平成7年のオフショアトーナメントであり、宿泊、燃料、飲食、物販の経済効果が見込めるビルフィッシュトーナメントでした。

◆◆◆ オフショアトーナメント（ルアー釣り大会）

エサも撒餌も使わないルアー釣り。「そんなもんで魚が釣れりゃ、漁師は苦労しない！」と言う漁業者に当然ながらルアー釣り経験は全くなく、3年間ルアー釣りDVDを見せ研修を行いました。しかし、なかなかうまくいかず、その都度漁協へ改善要望を行ってきました。大会事業費は、町からマリン4部門（オフショア、ビルフィッシュ、磯釣船釣、海の感謝祭）で90万円の補助があり、これを元に、パンフチラシの作成や、毎年2月に大阪フィッシングショーでメーカーへの協賛依頼を兼ねたPR活動などを行います。大会時には、漁船1隻あたり5～6人乗船し、5～6万円のチャーター料を支払います。通常、大会は15～17隻で行い、多いときは30隻を超えるときもあります。狙いは、大会だけでなく、通年の体験者



ルアー釣り大会で釣れたカンパチ

の増加です。その成果は顧客化し、多数の漁船が出港しています。長年、すべて実行委員会任せで漁業者は企画運営してこなかったのですが、昨年ようやく地元若者漁業者等から自主運営したいとの申し出があり、20年目にして初期の目的が達成でき実行委員長の世代交代をすることができました。交代後の第21回大会でも190余人で関西屈指の大会となり、マグロ狙い！アオリイカ狙い！等々新たな分野でも着実に成果を上げ大いに期待しているところです。

◆◆◆ビルフィッシュトーナメント（カジキ釣り大会）

オフショアの狙いは漁業振興ですが、ビルフィッシュは、宿泊、飲食、物販、燃料等地域振興全体が狙いです。漁船でなくオーナーボートの大会であり、漁港を占拠するので漁協の承諾が必要となります。交渉にあたって「クルーザーと衝突でもしたら大変なことになる」など抵抗も多く苦労しましたが、何度もの交渉の末、協力金の支払い等で承諾にこぎつけました。実行委員会には、漁協、すさみ町、観光協会、商工会、宿泊関係、運営経験者（大阪）、民間有志等に参画いただき、私が委員長に就任。事務局は観光協会で断られ商工会で落着きました。


釣り大会後の懇親会


多くの釣り船が係留された港の様子

狙いは地域振興であり、1人でも多く参加しやすい運営を目指してきました。県下でも、勝浦、串本大会は5～7年前から開催しており、スポーツフィッシングのルールが適用されていましたが、超大物（3メートル、100キロ級）は度々釣上がるものでなく、ルールを少し緩くしたローカルルールと正規ルールの2本立てで実施することにしました。第3回大会の時、大手協賛企業から「JGFAの後援を取付けるよう」進言がありましたが、参加者の85％は、すさみ方式のローカルルール希望のため、お断りすると協賛をすべてカットされました。さらに、漁協理事の一人が「こんな大会止めさせてやる！」という一幕もあり、「漁協の総意ならば文章で提出してください」「即止めます。但し、漁協関連事業（鰹ブランド化、オフショア、体験漁業）も一切止めます」と回答すると、他の理事から「大会は継続してほしい」旨の謝罪があり、漁業者との共存共栄に成功。試行錯誤の20年でありました。

成果としては、大会含め、シーズン（6～9月初）で億を超える経済効果があり、日本で1～2の大会規模に成長しました。

大会運営は40～50人のスタッフで、町職員、観光協会、商工会、摂南大学、NPO、民間等全てボランティアです。行政の理解と関係団体のご支援に感謝申し上げます。

◆◆◆女性アオリイカ釣大会なども計画

20年間事務局として支援頂いた商工会が職員削減で昨年は中止せざるを得なくなり、今年は観光協会で担当することになりましたが、常駐1人の厳しい状況です。

そうした中で、ルアー釣り大会やカジキ釣り大会以外、ミニボート釣大会、女性アオリイカ釣大会、磯釣船釣大会、障がい者向けバリアフリー祭り等々いろいろと計画しています。過疎高齢化の中、「何とかしなきゃ！」と日々奮闘しているところです。

小さな村から生まれたスポーツを全国へ
―小学生がグラウンド・ゴルフ発祥の地に集結―



湯梨浜町企画課まちづくり推進係　主事　●　東原　正治

◆◆◆ 第10回ジュニアグラウンド・ゴルフ発祥地大会

鳥取県湯梨浜町（旧泊村）のグラウンド・ゴルフのふる里公園「潮風の丘とまり」は日本海を見下ろす絶景のロケーション。全面芝張りの専用コースはグラウンド・ゴルフの聖地と言われ、年間を通じて数多くの大会が開催されており、全国から多くのプレーヤーが訪れます。グラウンド・ゴルフの愛好者は高齢者が多く、いつもはこの公園を訪れる方の年齢層も少し高めですが、毎年8月に行われる「ジュニアグラウンド・ゴルフ発祥地大会」の日は違います。

平成27年8月1日、第10回となるジュニアグラウンド・ゴルフ発祥地大会の開催日、この公園には北は東北から南は九州まで、全国から116人の小学生プレーヤーが集結。暑い日差しが照りつける中、「山梨すずらんチーム」の選手宣誓で始まったこの大会で、子ども達は真剣な眼差しでゴールポストを見つめ、ある時は気合を込めて、またある時は慎重にクラブを振っていました。

ホールインワンをした子どもは嬉しそうに笑顔を見せ、打ち損じてしまった子はくやしそうに肩を落とす。この日、子ども達は全国の友達と、グラウンド・ゴルフを通じて交流を深めました。

◆◆◆ 湯梨浜町から生まれたグラウンド・ゴルフ

昭和52年、湯梨浜町の泊地域（旧泊村）では、総人口の2割以上が60歳を超える実情に合わせて、高齢者向けのスポーツおよびプログラム開発という課題に取り組みました。設立された専門委員会は、たまたま大学生がグラウンドに描いた白線の輪を狙って、ゴルフクラブでボールを打っている様子をヒントにグラウンド・ゴルフの開発に着手しました。この年の10月に、用具やルールなどがほぼ完成。翌年には、マスメディアの全国報道を受けて問い合わせが殺到しました。

ルールは簡単、高度な技術は不要。全力を出す場面と集中力や調整力を発揮する場面がうまく組み合わされているグラウンド・ゴルフは、瞬く間に普及して300万人以上の方が楽しむ国民的なスポーツとなりました。



ジュニアグラウンド・ゴルフ大会の全景



ジュニアグラウンド・ゴルフ大会の様子

グラウンド・ゴルフを子ども達に

全国的な広がりを見せるグラウンド・ゴルフは、体育の授業や国体の公開競技に採用される一方で、愛好者の高齢化という問題を抱えています。そのため、日本グラウンド・ゴルフ協会や各都道府県協会は、世代間交流大会や活動の助成などでジュニア世代の育成や普及に力を注いでいます。

このジュニアグラウンド・ゴルフ発祥地大会も、もともとは鳥取県内の世代間交流大会からスタートしました。大会に参加した子ども達の「グラウンド・ゴルフは楽しい」「いろんな友達とこのスポーツを楽しみたい」という声に後押しされ、全国から参加者を募る大会に発展したのです。

なるべく沢山の方に参加していただけるよう、日本グラウンド・ゴルフ協会の支援を受けながら、県外からの参加者には旅費の一部助成を行っています。また、大会後のゲームやイベント等、小学生が楽しめる内容を工夫しながら大会運営を行っています。



大会後のオプショナルイベント「サザエ採り」



大会後のオプショナルイベント「船上魚釣り」

オプショナルイベントで発祥の地を感じる

例えば、毎年、大会の翌日はオプショナルイベントとして、「サザエ採り」と「船上魚釣り」を行っています。

今年のサザエ採りでは、海岸に撒いた１７０㎏のサザエを子どもが海に潜って採りました。会場ではサザエのバーベキューも行い、サザエのつぼ焼きを初めて食べたという子どももいました。「毎年、ここで泳ぐのが私たちの海開き」と東北から参加した子どもが言いました。

船上魚釣りでは、初めて乗る船にみんな興奮気味でした。途中、船酔いで気分が悪くなった子どももいましたが、みんな港に戻ってからも堤防で釣りを楽しんでいました。

どちらのイベントも、毎年、子ども達が来るのを楽しみにしている地元の漁協や住民の協力が欠かせません。

サザエ採り会場の小浜海岸ではイベント前に住民が海岸の清掃活動を行います。船上魚釣りに船を出す漁師さんは、よく釣れるポイントの下調べをしています。子たちに楽しい思い出を作ってもらいたい。グラウンド・ゴルフ発祥の地を肌で感じてほしい。そんな地元住民の思いで、イベントは成り立っています。

グラウンド・ゴルフを世界へ

この地で生まれたスポーツが、これからもみんなに親しまれるためには子ども達にプレーしてもらうのが一番ですが、私たちがジュニア世代の普及を目指す理由はそれだけではありません。グラウンド・ゴルフというスポーツには審判がいません。審判はプレーヤー自身です。ジュニア世代への普及促進には、子ども達にルールを守って行動する習慣や、プレーする仲間を大切にする心を身につけてほしいという願いも込められています。

また、町では、２０２１年、東京オリンピックの翌年に関西を中心に開催されるワールド・マスターズ・ゲームにおいて、「潮風の丘とまり」でのグラウンド・ゴルフ世界大会開催を目指すとともに、グラウンド・ゴルフの国際化に努めています。

子ども達がここで楽しんだグラウンド・ゴルフを世界中で多くの国の人とプレーしたいと思ってくれること、そしてこの町の思い出とともに国際化の一翼を担ってくれることが大会に携わるみんなの夢です。

直径1メートルの桶「はんぎり」で海上を競漕
―海外留学生も参加、国際色豊かに―



松前町産業課商工水産観光係 ● 松田 周一

松前（まさき）町を知っていますか？

松前町は、四国、愛媛県の石鎚山系に端を発した一級河川、重信川を境にして県都松山市に隣接し、道後平野の西南部にあります。西は伊予灘に面し、南は伊予市をへだて四国山脈を望め、豊かな自然と土地に恵まれ、20・32平方キロの全てが可住地です。

昭和30年3月に旧松前町、北伊予村、岡田村の1町2村が合併して新生「松前町」が誕生しました。現在では、人口3万人余を有する町となり、豊富な水と肥沃な土地を生かした農業をはじめ、工業、商業のバランスのとれた町です。

当町の産業は、平坦な地形と肥沃な地質を活かした都市型近郊農業として、米麦を中心に野菜・花きを基幹作物とする複合経営が行われています。地場産業は小魚を加工した珍味（おつまみ）の生産が盛んで全国シェアの大半を占めています。

商業としては、平成18年から新たな市街地形成地区を形成し、現在は敷地面積20ヘクタールの中四国最大級の大型商業施設「エミフルＭＡＳＡＫＩ（㈱フジ）が出店しています。

はんぎりとは？

はんぎりについては、味噌・醤油・酒等の製造時に使用する大きな樽または桶を半分に切って底の浅い桶にしたものを「半切り」と呼ぶようになった説が有力とされ、松前町のみならず全国でこの様な桶のことをはんぎりと呼んでいます。昭和初期ごろまでは盛んに使われていましたが、松前町では、地引網漁の衰退とともに職人もいなくなり、プラスチック製の桶も姿が見られなくなりました。

松前町では、主に漁師が使用する漁具の一つで、魚網や道具を入れたり、獲れた魚を入れたりするものでありました。地引網漁が盛んに行われており、網の点検や獲れた魚の運搬等に伝馬船（小型の船）より小回りが利くことからはんぎりに乗るようになったと言われています。

夏祭りの行事として始まったはんぎり競漕

文禄4年（西暦1595年）松前城主「加藤嘉明」が領内を巡察中、町内の地引網漁場で休息した時に、若い船子がはんぎりに飛び乗り、一つの道具も使わずに沖に係留されている親船の綱を解く様子を見て、「今一度見せよ」との要望に、今度は、3人の若衆が見事な競漕を披露したことが由来と



はんぎり競漕スタート前。一列に並んだはんぎりと参加者の真剣な眼差し



はんぎり競漕に参加した海外留学生の皆さん

されています。

現在のはんぎり競漕は、昭和47年（西暦1972年）本村地区にある蛭子（えびす）神社の拝殿新築祝賀行事として、本村及び新立地区の漁師の皆さんが松前内港で行ったのが始まりとされています。その後、中断した時期もありましたが、現在も「まさき町夏祭り」の名物行事として受け継がれています。

同じ「はんぎり」や「たらい」を使ったもので、全国各地でもさまざまなイベントが開催されています。ただ漕いで速さを競うだけでなく、ゲーム的な要素が含まれていたり、進むために道具を使っていたりと、それぞれの地域で違いが見られます。また、競技だけでなく、仮装賞を設けるなどショー的要素の強いところもあります。



競技用のはんぎり桶


はんぎり競漕参加者の皆さん

他市町との「はんぎり」イベントの違いは漕ぎ方にあります。直径1メートルほどのはんぎりの上に立ち、約20メートルのコースを道具を使わず、体の上下運動だけで前に進む姿は、過去の漁師の勇ましい姿を映し出し、そのダイナミックさは松前町でしか観ることが出来ない魅力のひとつです。

◆◆◆ 町制施行60周年を機に規模拡大

平成27年、松前町は町制施行60周年を迎えました。60周年記念は「H―1グランプリ」と銘打ち、町内外の参加者はもちろん、愛媛大学の海外留学生の皆さんにも声掛けをして、松前町の塩屋海岸で国際色豊かな大会を行いました。

海外留学生の感想でも「オモシロイ、ニホンノ、マサキノブンカ」「キモチヨカッタ。デモ、ススマナイ」など面白さの中にも競技の難しさが感じられました。

猛暑に負けない熱い戦いは、約180人が水しぶきを上げながら白熱のレースを繰り広げ、テレビやラジオ番組でも放送され、松前の「はんぎり競漕」を広く発信することができました。これをきっかけに、松前のはんぎりに町内外からもっと大勢の方に参加して頂ければ全国大会も夢ではないと思います。

審判、点呼、記録、補助員など、「H―1グランプリ」には約100人のスタッフが携わっており、その全てがボランティアスタッフです。大会スタッフの方に話を聞くと「はんぎり競漕を見ていると楽しくて仕方ない」「選手たちが一生懸命に漕ぎ、仲間たちと盛り上がっている姿は感動的である」など、運営している方からもこの松前町独自のはんぎり競漕への愛着がうかがえ、松前町の夏のイベントとしての定着が感じられます。

◆◆◆ これからは町外に発信

はんぎり競漕は現在、「まさき町夏祭り実行委員会」を中心に企画運営が行われています。平成27年、松前町は町制施行60周年ということで、より多くの人に「はんぎり競漕」の魅力を知ってもらおうと、さまざまな機会を設けました。

しかし、この委員会だけで魅力を発信するには限界があります。今後は、はんぎりを含めた松前町の魅力を町民一人ひとりが町外へも発信していくことが大事と思われます。

今年のはんぎり競漕（H―1グランプリ）は8月6日にまさき町夏祭りの1つのイベントとして開催します。塩屋海岸で繰り広げられますはんぎり競漕、松前公園でもイベントが目白押しです。松前町に真夏の祭典に是非一度お越し下さい。

清流仁淀川で国際水切り大会
―誰もができる素朴な遊びで流域を活性化―



NPO法人仁淀川お宝探偵団理事長 ● 生野 宜宏

「水切り」を知っていますか?川に石を投げてピョンピョン跳ねさせるあの遊びです。石飛ばし・石はね・石きり・三段ばね・飛び石・チチッコ・チチクリ・ストーンスキッピング（英語）…。様々に呼ばれている水切りですが、水辺に立ち、足元に小石が転がっていれば、誰もができる素朴な遊びです。人が2本足で活動を始めたはるかな昔から存在する普遍的な遊びかもしれません。

日本は川に恵まれ、全国的に水切りの文化が根付いているようで、呼び名の多さがそれを物語っています。ここでは水切りと呼ばせてもらいます。清流仁淀川も例外ではありません。流域で育った多くの人は懐かしいと感じています。

◆◆◆ お金のかからないイベント

水切りという遊びはお金が掛かりません。手ぶらで川に行って、石を拾って投げるだけです。水の中に入るわけではないので（中には水に浸かって投げる方もいますが）比較的安全な遊びです。投げた石が人に当たったり、手を地面にぶつけたりといった事故も今のところありません。天気の急変や、増水に気をつけるだけです。私たちは、楽しいイベントに盛り上げるために、地元の産業にまつわる賞品を勝者に進呈しています。例えば、仁淀川は茶処です。流域各所には様々なお茶が銘柄を競っています。同時に酒の国　土佐の、造り酒屋も3軒あります。ユニークな温泉も6軒あります。仁淀川を応援したいとANAさんからもチケットの提供も頂いています。参加選手約200人、ギャラリー入れて600人規模のイベントですが、70万円の予算で賄っています。40人のボランティアスタッフの奉仕のおかげですが。



仁淀川国際水切り大会・女性の部会場風景

◆◆◆ 最終目標は地球環境

川は流域に住む人たちの心を映す鏡です。日本一の水辺利用率を誇りながら日本一の水質を保っている仁淀川は人類の宝です。この奇跡を実現させているのが、流域住民の志なのです。しかしながら、この清流仁淀川の流域地域も少子高齢化、人口流出にあえいでいます。仁淀川の美しい水を守り、豊かな自然と、人々の平和な暮らしを守るためにも、流域の活性化は急務です。そのためには多くの人が仁淀川に足を運ぶ仕組みを作らなくてはなりません。

そうした中で水切り大会はとても有効だと思います。何しろ、投げるのに最適な、丸くて平たい石を川原で探して歩くのですから。そして澄んだ川面に広がる波紋を見つめて感動する。教えるのではなく気づいてもらうのです。参加した人は皆、誰よりも仁淀川を見ることでしょう。楽しい1日を過ごした仁淀川に深い愛着と誇りを感じることでしょう。川を大切に思う心はここから生まれます。この川はさらに美しくなるでしょう。川が綺麗になれば、海が蘇ります。海が元気になれば、地球環境は飛躍的に良くなるでしょう。たくさんの仁淀川を増やしたいです。

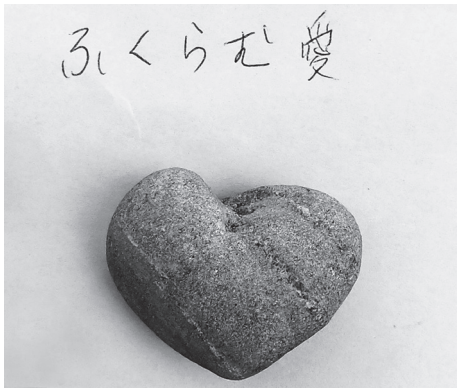
◆◆◆ どっぷり体験!仁淀川

NPO法人仁淀川お宝探偵団が発足したのは、

高知県の呼び掛けで市民による手作りの地図「仁淀川お宝地図」を作成するのがきっかけでした。2003年から現地取材を重ねていましたが、取材時に、川原に立つと必ず誰かが水切りをします。皆さん、とても上手いのです。翌2004年7月に仁淀川を元気にするためのイベント「どっぷり体験！仁淀川」を開催しました。ライブやクラフト教室、川漁師体験、水生生物調査、カヌー教室など盛り沢山でしたが、メーンはやはり水切り大会でした。これが第1回となります。どうせなら大げさな方が楽しいし、そのうちこうなるといいなと「仁淀川国際水切り大会」となったのは2回目のことでした。32人の第1回から開催を重ねるごとに参加者は増え続けています。第12回の昨年は176人でした。



仁淀川国際水切り大会審判



仁淀川国際水切り大会と同時に行われた
ハート石コンテストでハート賞を受賞した石



仁淀川国際水切り大会と同時に行われた水切り教室

「楽しいけど、難しい。奥が深い」

チャンピオンシップ（達人クラス）・男性・女性・子供（10歳以下）の4部門に分かれ、トーナメント方式で、水切りの美しさ・飛距離・回数の総合評価をもって順位を競い合います。同時にハートの形をした石を見つける「ハート石コンテスト」や石に託したメッセージを評価する「石文コンテスト」や「宝探し」、初心者のために水切り教室も開催します。参加された方の感想に「楽しい。来年も参加したい」「来年は勝つ」「水切りが好きでインターネットで検索した。お父さんにお願いして高知に連れてきてもらった。地元の川で練習している」「楽しいけど、難しい。奥が深い」という声が聞かれました。県外からの参加者や海外からの参加者も増えています。これは水切りといえば仁淀川と呼ばれるようになってきた表れではないでしょうか。

一番頭が痛いのが駐車スペースの問題です。季節柄、開催当日（毎年8月の第4日曜日）は泳ぎやバーベキューを楽しむグループが多く、どこかの海水浴場の様相を呈しています。お陰で、水切り大会に参加する人の車を止める場所が少なくなってしまうのです。そこは知恵を出し合い、地元町内会にお願いしたり、町役場の情報を貰ったりで解決する予定です。

仁淀川を水切りの聖地にしよう

県外、国外で水切り大会を開催している団体が増えてきました。荒川には水切りクラブがあり、天塩川・阿武隈川では年に1回水切り大会、石切り選手権を開催しています。海外でも、アメリカや、イギリスなどで開催されている動画が見受けられます。どれも手作りのイベントらしい温もりのあるものばかりで、交流できたらと思うのです。全国の川でそれぞれの水切り大会を開催して、勝ち残ったチャンピオン達が、仁淀川に集まって、その年の日本一を決める、世界一を決める様にできたら…と、夢見て今年の準備をしています。みなさんの川でも水切り大会を開催しませんか？お手伝いしますよ。

吉凶を占う神事の大綱引
―観光化せず、古式伝統を遵守―

糸満市商工観光課 ● 大城 高彦

本市は沖縄本島の最南端にあって、那覇市から南へ12キロのところに位置する人口約6万人の市です。沿岸部の糸満地区の住民は、「サバニ」と呼ばれるくり舟に乗り南洋各地へ出漁した糸満漁民で知られ、男は追込漁、女は魚行商に従事していました。漁業以外にも、内陸部では畑作を中心とした農業、畜産も盛んです。また、那覇市に近く、近年は人口が増加し、都市化が著しく進んでいます。

市の南部の旧三和村一帯は沖縄戦最大の激戦地で、ひめゆりの塔、健児の塔などが建立し、その周辺は沖縄戦跡国定公園に指定されています。

◆◆◆ 沖縄県内の一般の綱引きの起源と伝承

稲の不作と害虫に悩まされたある村の頭が、村人に対策の知恵を求めたが、これという妙案が得られず、思案のあげく自分の父に教えを請いました。父の教えは「田の畦で大綱を引き、太鼓を打ち鳴らし、松明を振りかざしなさい」というものでした。その父の教えに従って一夜を騒いだところ、害虫が全滅したので毎年6月（旧暦）カシテーの日には欠かさず綱を引いたという伝承があります。沖縄の綱引きは、豊年予祝と併せて害虫駆除の意図も含まれ伝承されてきたことが伺えます。

◆◆◆ 糸満大綱引とは

糸満大綱引は豊年と大漁祈願、家内安全、無病息災を祈る神事で、南北に分かれた雌雄の綱の結合によって実りを予祝し、勝負の結果で吉凶を占う行事です。綱作りに用いられる稲藁（わら）は総重量で約10トン、綱の太さは結合部付近が最大で直径1・5メートル、長さは雌雄合計180メートルにも及び県下でも最大級を誇り、他の地域では祝祭日に行われ観光化されていますが、糸満では古式伝統を遵守し、毎年、旧暦の8月15日に行います。そのため、行事自体を別称で「ハチグヮチ・ジュウグヤー」、または「ジュウグヤー」とも呼んでいます。

◆◆◆ 綱引き前に市民参加のパレード

当日は、午前8時頃から国道331号、白銀堂と糸満ロータリー間で交通規制を敷き、大綱作りが行われます。大綱は雄綱（ウージナ）、雌綱（ミージナ）からなり、2週間前に字糸満10の各区で作られた大口綱とハクガキ綱を寄り合わせ、南組（ヘーカタ）、北組（ニシカタ）が毎年交互に雌雄の綱を約3時間かけて作り上げます。

大綱引のまえに市民1千人余りが参加しての「道ズ



大綱引前のパレード。「ゆがふう」「かりゆし」の旗頭を先頭に1千人余りの市民が参加


雌綱と雄綱をつなげて大綱の完成

ネー」と呼ばれるパレードが午後2時から開始されます。道ズネーは、「ゆがふう※」「かりゆし※」の旗頭を先頭に1千人余の市民が参加して、糸満小学校を出発して、舞踊や歌、子どもエイサー等を沿道の観客に披露しながら、白銀堂までの約1㌔を練り歩きます。

道ズネーが終了する午後5時からいよいよ大綱引の開始です。南北両陣営から「イチマンマギー」「マカビチャーン」という糸満の伝説上の人物に扮した若者（シタク）が戸板に担がれ登場します。綱の中央で対峙して、それぞれの陣営の士気を高めます。にらみ合いが終わるといよいよ綱引き本番となります。

◆◆◆ 駆け引きが特徴

綱引きの競技時間は30分とし、勝敗は一方に10㍍引いたら勝ち、時間内で10㍍引けないときは、2㍍以上引いた方が優勢勝ち、双方2㍍以上引けない場合は引き分けとなります。以前は4間（7・2㍍）で勝ち、三尺（90㌢）で優勢勝ちとされていました。

綱引きの方法も南北両方が一斉に引き合うのはほんの数分で、相手方が引いている時は、綱に乗って座ったりして休みながら重量をかけ引かせないようにして、疲れてきた頃合いを測って引き返したりと、双方で駆け引きを行うなど、他にない特徴があり、戦前（昭和21年以前）は時間制限がなく勝敗が決するまで何時間でも引き合っていたといわれています。





糸満大綱引の様子

用語解説

【世果報】 ゆがふう

世の果報、すなわち豊年、豊穣、幸福などを意味する言葉。甘世、弥勒世ともいう。世果報（よがほう）は琉球王府編纂の歌謡集「おもろさうし」や琉歌などのなかでもよく歌われている。

【嘉例吉】 かりゆし

沖縄独特の熟語。「嘉利吉」とも書く。めでたいことや縁起のよいことの意味。家人や親族の男が遠方へ旅立ちする場合、婦人たちがその家に集まり「だんじゅ嘉例吉」を歌って航海安全の祈願をしたり、また元旦には若木や塩を嘉例吉物（カリーナムン：縁起物）として霊前や火の神に捧げる風習がある。

【旗頭】 はたがしら

竿の長さ：6㍍50㌢～8㍍

重量：40㌔～50㌔

【股抜半套】 ムムヌチハンター

持ち手の衣装はムムヌチハンター（股抜半套）と呼ばれ、1本の旗頭に持ち手は15人程度。その後ろにチンク隊（金鼓）が鉦、太鼓を鳴らしながら、白銀堂まで勇ましい旗の舞を披露します。

※ミチズネー先頭の「ゆがふう旗」には梅の灯籠、「かりゆし旗」には桜の灯籠がほどこされ、通常「ゆがふう旗」は雄綱（ウージナ）、「かりゆし旗」は雌綱（ミージナ）に付きます。

【シタクと綱と旗頭のきまり】

ゆがふうの旗頭は雄綱（ウージナ）につき、マカビチャーンのシタクがその綱にのります。

かりゆしの旗頭は雌綱（ミージナ）につき、イチマンマギーのシタクがその綱にのります。

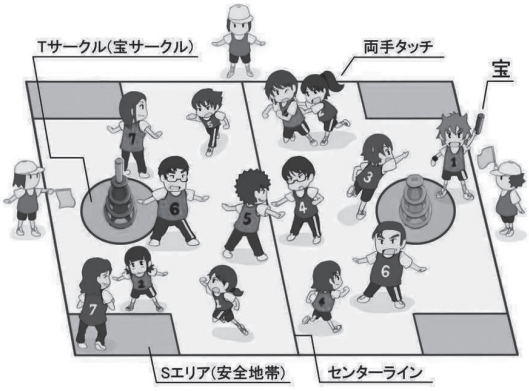
世代や性別を超えて楽しめるスポーツ「鬼ごっこ」
―子どもの教育や地域振興、文化振興などに活用―



一般社団法人鬼ごっこ協会
国際スポーツ鬼ごっこ連盟　事務局長
● 平峯　佑志

「鬼ごっこ」に注目した理由

鬼ごっこ協会は、２０１０年６月18日に青少年の健全育成を目指して設立されました。代表理事は、城西国際大学客員教授でもある羽崎泰男が務めております。羽崎代表は、昨年に閉館となった東京・青山にありました「こどもの城」の事業部長として30年間程、現場で多くの子ども達や親子に向けて鬼ごっこをはじめとして、運動、造形、音楽、表現など様々な遊びのプログラムを開発してきました。そこで、なぜ「鬼ごっこ」に着目をしたのか。話は20数年前に当時の厚生省から、肥満の子ども達に向けた健康改善の運動プログラムを開発してほしいという話をいただいた時に遡ります。既存のトレーニングをさせても、元々運動に苦手意識がある肥満の子ども達は全く関心を示さなかったにも関わらず、鬼ごっこをさせたところ、運動ではなく「遊び」ということで苦手意識も持たずに楽しく身体を動かしてくれたことが、鬼ごっこに着目したきっかけとなりました。



ルールイラスト



スポーツ鬼ごっこをする子ども達

老若男女ができる新スポーツ「スポーツ鬼ごっこ」

鬼ごっこと聞くとほとんどの方は、幼少期の思い出が蘇ってきて童心に戻ることができます。老若男女みんなが世代や性別を超えて、そうした思いを共有できるものは数多く存在しないはずです。当協会では、諸説ありますが分類すると約３０００種類もあるともいわれている鬼ごっこ全般を取り扱い、子どもの教育やスポーツ振興、地域振興、文化振興のために活用しています。活動の中心は、当協会オリジナルの「スポーツ鬼ごっこ」の普及啓発、イベント・大会の開催、指導員・審判員の育成を行っております。スポーツ鬼ごっこは、ルールは決められたコート内で自陣にある宝（トレジャー）を守りながら、相手陣地の宝を獲得しにいくスポーツです。戦略や戦術も豊富にあります。コンセプトは、あくまでも「鬼ごっこ」ということです。スポーツ競技なので、もちろん勝負も大切にしますが、チームメイトと楽しくプレイすることや仲間と協力してコミュニケーションをたくさん取ることの大切さも強く伝えていきたいと考えています。指導者・審判員の育成にも力を入れておりまして、43都道府県に１３００人程の公認ライセンスを取得された方が、日本各地にいて、スポーツ鬼ごっこの普及を後押ししています。スポーツ鬼ごっこを実施した地域は、国内では47都道府県、２７３市区町村となり、日本全国での開催を実現することができました。

鬼ごっこの歴史文化の考察

歴史を遡ること約1300年前から「鬼ごっこ」は伝承文化として、日本社会で後世より受け伝えられてきています。もともとは神社仏閣の宮中行事として、五穀豊穣や天下泰平を願うために行われていました。文献としてもよく登場するのが「ことろことろ」です。江戸時代には絵画でも多数描かれています。現代で鬼ごっこだと多くの方が認識されているのは「追いかけっこ」だと思うのですが、「ことろことろ」は追われるの一般的な鬼ごっこの関係性だけでなく、「鬼」が向かい合い、列になり連なって、列の最後尾の「子」をタッチしにいくのを、列の先頭の「親」がタッチされないように守るという3すくみの形で行われた遊びである所に特色があります。鬼という存在は抽象的に飢餓、災害、怠け心などを表しているのですが、そうした困難から親が子を守るという、現代にも通じる家族観や人間観を表しているといえます。当協会では、こうした鬼ごっこの歴史を継承した上で活動をしております。



「ことろことろ」の様子


全国大会の写真

地域活性化のための普及活動

当協会では、ビジョンとして「鬼ごっこのある町づくり」を掲げています。代表的な取り組みとして「スポーツ鬼ごっこ全国大会」があります。スポーツ鬼ごっこを取り入れて活動されている地域の様々なスポーツ競技をしている子ども達や児童館、学童保育、こども会など、多様な団体が日本一を目指して年に1度予選リーグと決勝トーナメントを通じて優勝を目指して競い合っています。全国大会をこれまで開催してきた地域では、地元の地方自治体や教育委員会、商工業者、一般市民などから協賛・協力をして頂いて、地域をあげた取り組みになるように工夫をしています。第4回全国大会は八王子市で開催しまして、競技者700人、関係者含めて2000人近くが会場を訪れました。大会での地域振興事例としては、地産の農産品を地元企業にご提供頂いて、優秀チームに商品として贈呈を行いました。全国大会は日本各地から参加があるため、参加チーム同士が触れ合うことで地域間交流へともつながります。鬼ごっこが町にあることで、町が元気になり、健康的になってもらいたいという思いがあります。

目指すは「世界」へ

日本全国での日本の伝統文化でもある「鬼ごっこ」を「Onigokko」として世界へも広げていこうと考えています。道具も必要なものが少なく、場所も特に選ばずに、ルールが簡単で、世代を超えて楽しく取り組むことができる「鬼ごっこ」は、先進国や貧困国の差がなく、いかなる国でも普及される可能性があります。日本的な鬼ごっこの普及は海外への日本文化の振興に繋がるだけでなく、「遊び」による異文化交流を図ることもできます。昨年は、国連UNOSDPの開催した「国連ユースリーダーシップキャンプ」でアジア諸国の若手のリーダーとなりうる若手の方々へ向けてスポーツ鬼ごっこを実施しましたが、国籍や言語の差を超えて、スポーツを通じて熱く交流できたことは、大変な自信へとつながりました。1300年前より伝わっている鬼ごっこを通じて、国際社会の平和に少しでも貢献をしていき、地道な活動を続けていきたいと思います。







評価のポイント

●日本古来の伝統武芸である流鏑馬を競技化し、神事として開催するものは男性しか参加できないものが多い中、女性だけが出場するものは全国でも類がない貴重な企画である。
●国内外からの関心も強く、全国各地から参加者が集まるほか、外国人観光客等の誘致につながっている。
●十和田市内の乗馬倶楽部等関係団体や高校、大学が連携し運営している中で、イベントの開催に限らず、選手、指導者等後継者の育成にも努めている。
●古くから馬の名産地として飛躍を遂げた十和田市の和種系の馬を活用した街づくりの起爆剤となるイベントである。

次回開催日程

■開　催　日：平成29年4月22日(土)～23日(日)　■開 催 場 所：中央公園緑地
■問い合わせ先：
・団体名　桜流鏑馬実行委員会
・住　所　〒034-0001 青森県十和田市大字三本木字佐井幅115-2（十和田乗馬倶楽部内）
・電話番号　0176-26-2945　・URL　http://www.towada-joba.com/

大賞

第20回
ふるさとイベント大賞

内閣総理大臣賞

桜流鏑馬（さくらやぶさめ）

青森県の南に位置する十和田市は、国の特別名勝及び天然記念物に指定された「十和田湖」「奥入瀬渓流」を始めとする大自然を有し、日本を代表する観光地として知られています。

一方、十和田市現代美術館を始めとするアートな街づくりを展開している市街地地区は、明治期に軍馬補充部三本木支部が設置され、国内最大規模の軍馬補充部支部として栄えた歴史があります。

現在、市街地地区の中心部にある「官庁街通り」は、「日本の道100選」にも選ばれた通りであり、軍馬補充部支部の石碑や馬のオブジェが設置されるなどの整備がされており、「駒街道」という愛称で親しまれています。また、「十和田市馬事公苑 駒っこランド」では、馬と触れ合えるほか、全国的にも珍しい馬の歴史や文化の資料が展示されている称徳館も開設されています。このように、十和田市は今もなお、馬の歴史が色濃く残る「駒の里」として近隣市町村から認知されています。

毎年4月20日から5月5日には「十和田市春まつり」が開催され、官庁街通りや大会会場となる中央公園緑地一帯は鮮やかな桜並木が咲き誇ります。中央公園緑地は観桜会場としても解放されており、市民を始め多くの観光客で賑わっています。

桜流鏑馬はこの「桜」と「駒の里」であることを、市民を始め、県内外に広くＰＲするため行われた春季イベントです。

もともと「流鏑馬」は、神事として日本全国で広く行われていますが、そのほとんどは男性騎士が参加しています。しかし、桜流鏑馬は日本で唯一「女性のみが参加できる」という一風変わったイベントであり、毎年、全国各地から集まった女流騎士が初級・中級・上級に分かれ、日頃の鍛錬の成果を競い合います。

女流騎士達が華やかな衣装で馬に跨り、桜並木を疾走して的を射る様は「勇壮」にして「華麗」。この美しい時代絵巻を見るべく、毎年多くの観客が訪れており、「十和田市春まつり」の賑わいの一翼を担うまでに成長しました。大会中は実況も行われ、初めて流鏑馬をご覧になられる方にも分かりやすく解説しています。この他にも、会場内では地場産品を用いた露店や「馬とのふれあいコーナー」の設置、「やぶさめビンゴゲーム」などを実施し、幅広い年齢の方に楽しんでいただくことができます。

是非、歴史と文化そして観光資源が融合した、十和田市でしか見ることができない「桜流鏑馬」をご覧ください。

主催者メッセージ



桜並木の中を日本各地、さらには海外からも集まった女流騎士が疾走して的を射る姿は必見！華麗な乙女たちが次々と疾走していく光景を観にカメラマンもたくさん訪れます。競技のほか衣装コンテストもあり、人馬ともお気に入りの和装で参加しています。

日本の馬が日本の伝統を演じるという、世界に誇れる「桜流鏑馬」を是非ご覧ください。

桜流鏑馬実行委員会
プロ級選手･流鏑馬インストラクター
上村 鮎子さん





平成27年開催DATA

自治体名	青森県十和田市
自治体人口	63,444人 ※H27.12末現在の住民基本台帳人口
主催団体	桜流鏑馬実行委員会
開催回数	12回
開催日	平成27年4月25日(土)-26日(日)
開催場所	中央公園緑地
観客数	12,000人（2日間）

地域づくり5月号 特集編（通巻323号） 楽しむスポーツイベントによる地域活性化 平成28年5月1日 一般財団法人 地域活性化センター発行

宝くじは、みなさまの豊かな暮らしに役立っています。


点字本レシピ集


冊子
「フラッグフットボール作戦ブック」


ベンチ

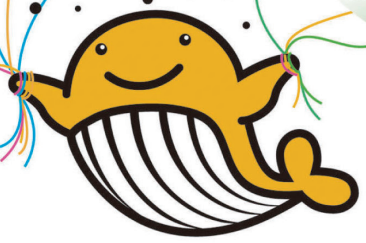

さくらの若木植栽


一輪車


パブリックアート


冊子
「おやこの食育教室
（三角巾付）」


胸部X線検診車



宝くじは、図書館や動物園、学校や公園の整備をはじめ、
少子高齢化対策や災害に強い街づくりまで、
さまざまなかたちで、みなさまの暮らしに役立っています。

一般財団法人 日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や
公益法人等が行う社会に貢献する事業への助成を行っています。

一般財団法人
日本宝くじ協会
http://jla-takarakuji.or.jp/

